攝州名所巡覽図絵

二

ル 4
4734
2

有馬頼寧文庫藏書

ルイ 4734 2

播磨名所巡覽圖會卷之二目錄

長田神社
長田の里
盛俊の墓
弱林日松
忠度塚
まのく橋
紀章孝記圖
赤地の池
古井の細
八幡宮鏡池
雀飛紀矢
卒社 八幡 勅書御供不
赤社 村上焼窯
明泉寺
蓮の池蓮の羽
尻池
濱の継橋
白ひの梅
牧賢忠死圖
盜人松
松瓜村雨 二人墓
鶯の尾の屋
義經腰掛

兵庫より諸方紀程

○上りの法

楠公碑へ 六丁
生田へ 廿六丁
布引滝へ 一里余
菖蒲谷へ 三里
まやさん へ 二里半
ちうげへ 三里
あしや へ 四里
西の宮へ 五里
尼ざきへ 七里
神崎へ 八里
大坂へ 十里
京へ 十九里余

○下りの法

和田岬へ 又丁
長田へ 廿丁
須磨寺へ 一里半
一の谷 男川へ 二里
あかしへ 五里
三木へ 七里
姫路へ 十四里

○紅葉の名

むろ、 二十里
とも、 五十里
宮浦へ 九十里

聖霊權現 勝福寺

須磨
紀平治祠
幸代宮祠
須磨寺
芭蕉翁碑
道羅川
二ノ谷
大五輪石塔
蓮池
猿頁坂
柱女塚
岩家
須広の浦 日上社
日月見の松
教政薬師
本堂 護広堂 鐵寺堂 十王堂 馬頭観 二王門 義経腰掛松 弥平竹 若木橋
惹雲の滝
村上帝霊跡
三ノ谷
男川 摂州 播州
奥畑佐藤氏家
大山寺
多壺
山田
須広麓
茅田氏故家
重衡松
須広関屋 須広坂口 須広坂屋
一ノ谷 鵯越 逆落 弱弓 鉄拐山
安徳天皇行宮
熊谷平山二三熊
塩屋
姉婆の松
畠水祠社
烏滸
多聞寺
大義谷譯
源氏りう 麓の井

八幡宮
稲荷祠
脇塚
両馬川
赤羽祠社
妙見ノ社
明石 つくしの浦 日浜 日海 日濱 日迫門 日泊 日星 日駅
月山
岩屋祠社
若樂寺 平清盛石塔 明石ノ石ノ碑
狐塚
無量光寺
惣門
明石川
密蔵院
山王社
宝蔵寺
藤沙碑
赤石
坂上寺
朝雲陽蔵
松江
休天祠
人麻呂ノ社
本松寺
楼寺
忠度塚 日照寺 首枕塚
明石鎮城
御茶屋
平臥天王
長林寺
日論寺
園部松
日月の松
海士文狭磯塚
皇子村
松上ノ城趾
林村
林村城址
十論寺
和坂村
松吉城址
中津橋城址
大久保譯
大岡松

黒石明神　清水里
江牟ヶ浦　魚住泊
住吉神社　岡伽寺
本堂　護摩堂　観音堂　三昧堂
老幼堂　三重塔　鐘楼　山門
慶明寺　住吉神社
惣社　將法論寺
近江寺　社石權現
歯朝梅　神出城跡
清水寺　本堂　薬師堂　老幼堂　三昧堂　鐘楼
三艸川　阿弥陀堂　二層塔　奥院　赤松氏墓
瀧野古城　瀧野　日川
鳴尾山　光明寺
引尾山

清水川　長江浦
名寸隅新池　魚住城址
如意寺
榛谷城跡
八幡宮　日奥社
明王寺　日輪寺　秋月神　老室松
雄子尾嶮子尾　伊川城址
地中清水　性海寺
最明寺　時頼
三艸山古戦場　疾風松
光明寺陣所

長田

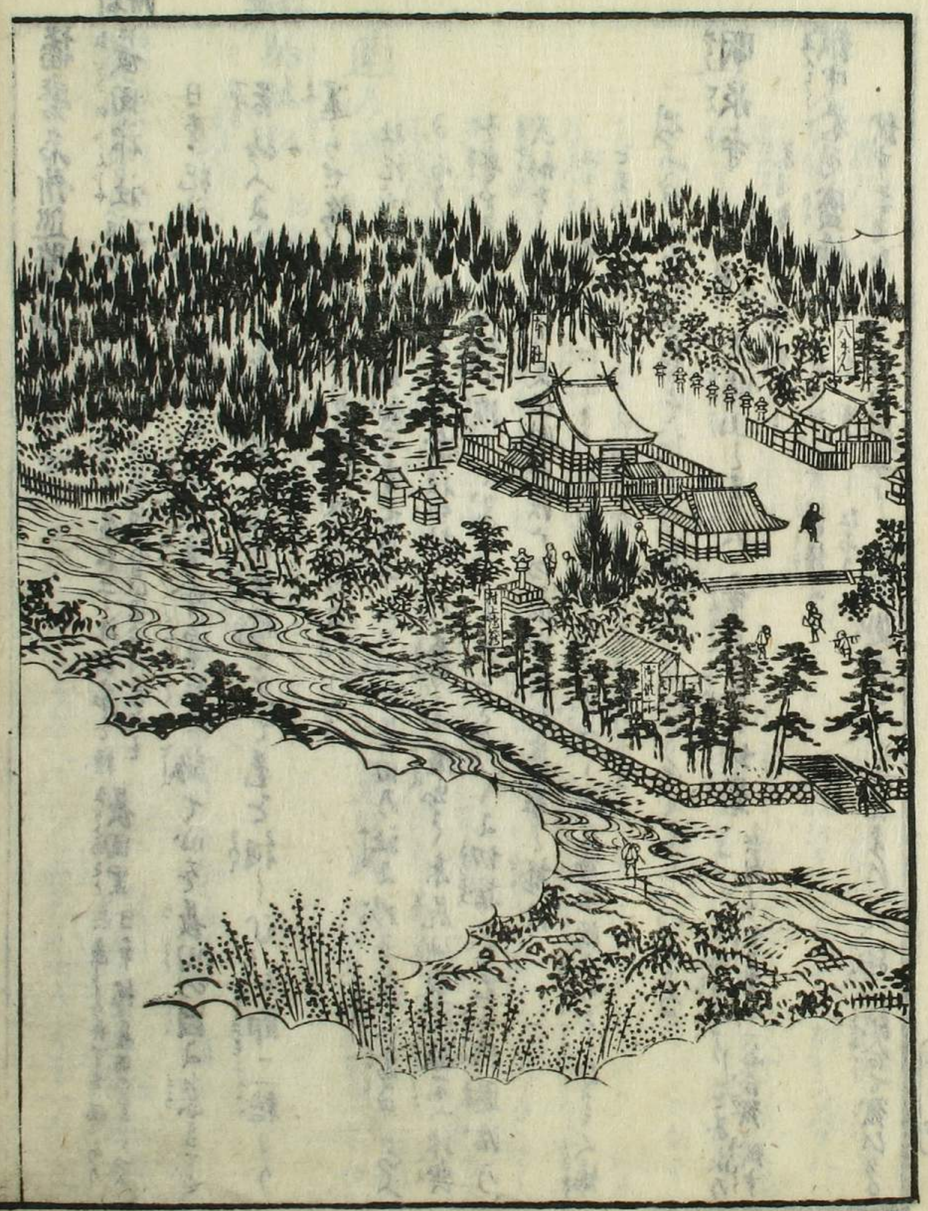
天水
雨露も
めぐみ
あまねき
時は
いつの春
長田の
里も
又苗
なるかり

素仲

長田社

攝社二社

末社四社



長田神社 長田村にあり 樹ゑ亜松二丁洋氏家を経て本社まゐる式内にて別名六月十八日此里字村条孔を

長田里 兵庫より北丁半西にあり 日本紀長田の里くらべ

日本紀神功皇后記云事代主命皇后に諭て心を長田の國に祭れ云々

若狭へ入て条山渡り分長渡を出て先と相しむ云 即二韓より

還らせ給ふ附のまうて出田のまうけ

社記云村上天皇天徳和三年七月十五日雨と長田の社に降る○又太郎[illegible]

まうあり墨人形を三ヶ余社の神の森より造出す東屋池の邊に一神祭

を寄つゝく神田村の漢とそかのまゝ人形とさんぐゝに切捨ゝ三韓退治の

其仏なりまうあり又山附西浜広の茅田氏を宮家と称ず

梅ヶ小墨人像と切捨ゝ其後の造ゝ[illegible]ゝ 源氏物語浜のまうひさし人像

と見られまうあり又和泉郡六月まうひまうあ

[illegible]ふまうまれて[illegible]とのまうをきりにまりてまらへつるゝ

明泉寺 長田村の 天照山と号ず 本尊大日如来 そへの大伽藍なりしと寺永の兵乱より荒廃す一谷合戦の残軍

茶可盛後の陣所なり

城中茶可盛後墓 長田村名倉池の傍なり 城中茶可盛後は一谷の残軍より逃れ逃るべきこと先えば一人残て孤合て戦ひる

が猪股近平六則綱と孟並く引組ぐ馬より落盛後は空へうる大力の若者なれば

廿人かゝて内カ六十人ばかりて上へもる大和と一人して扱ひられば七八十人力もみぐられば

近平六の及ぶ所にあらず推付く首をとれんともる小者共弱々れば又十よりも若

家を弱みくさて小姑歌を生合さう仮りて紙が首と云ばやとひ盛後を中う

も御辺則綱が命を助け長し給ひ鎧反を中て和反并を親しき人とるべき

すさんと激しく人を盛後歌びて云く我は男女の子ぐる二十余人拾さらんば彼ホ

のるをえぐとよ長く御恩をぐゆう中家を給人とらふ茅の曲綾い水田ゐる者の

中の畔りみ小三人屁打うけて物語りて盛後が池沙と見をは左右のよ

かとの芝逆さまよ綾の源田(宴例)に既のみの屋に笑る岸の塚よ蛇んくとる

石式則綱上よのりて首を接切る力の先よ要きえく捨げ馬よりて独入る

蓮乃池 長田の西の方よあり年家陣所の大きえ長廣さ 足百八十畝むゝ一紙基碁外の駒けよ拾う

蓮の河 池のゆ山ぎーまる去人形基の河とゝ其実のまゝ

駒林松 駒林い仏造ゝ乃地名ゝり松ゝ松林のまゝ

光源氏のまゝ俗況之今二条の松ゝ[illegible]て一附ゐ

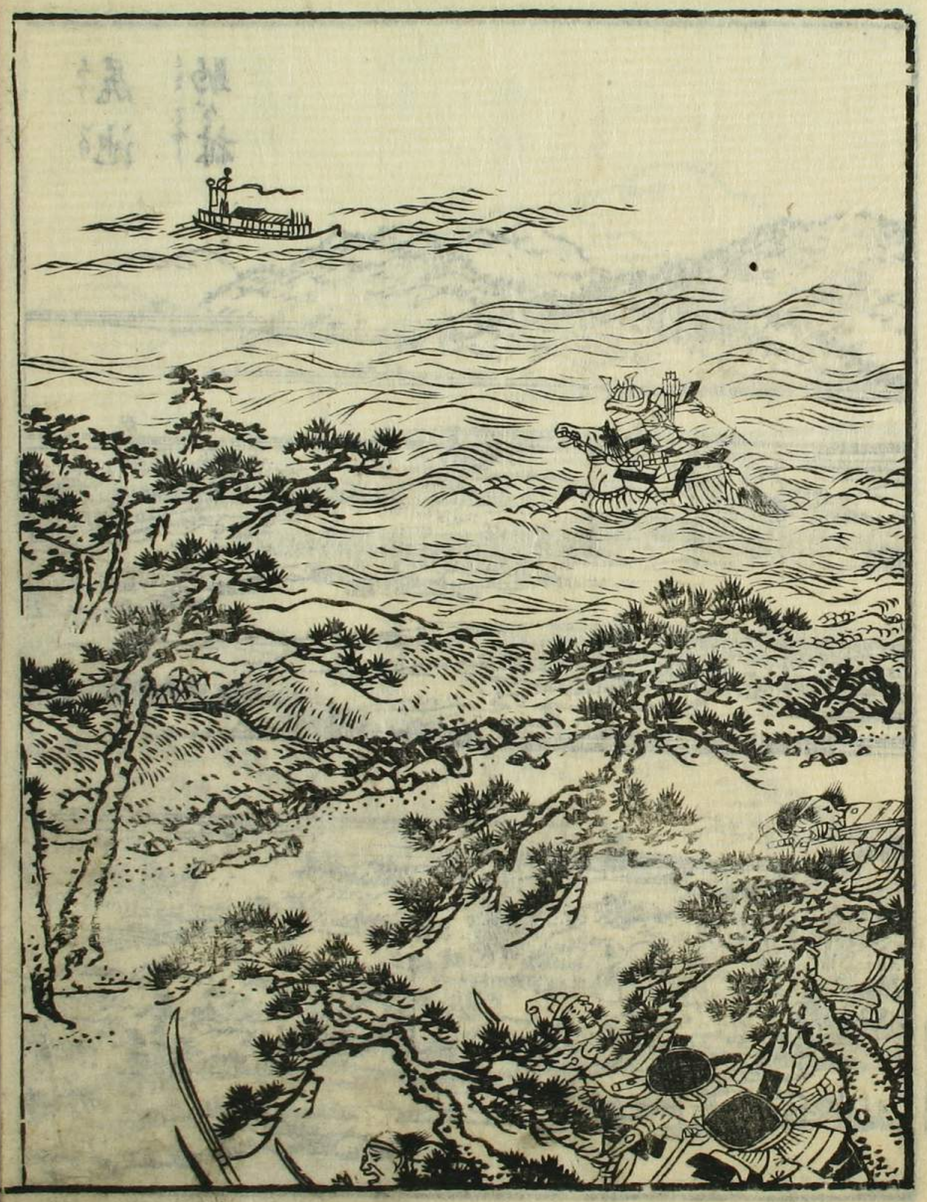
いなへの駒り林の松 古歌もかゝまをり 基礼

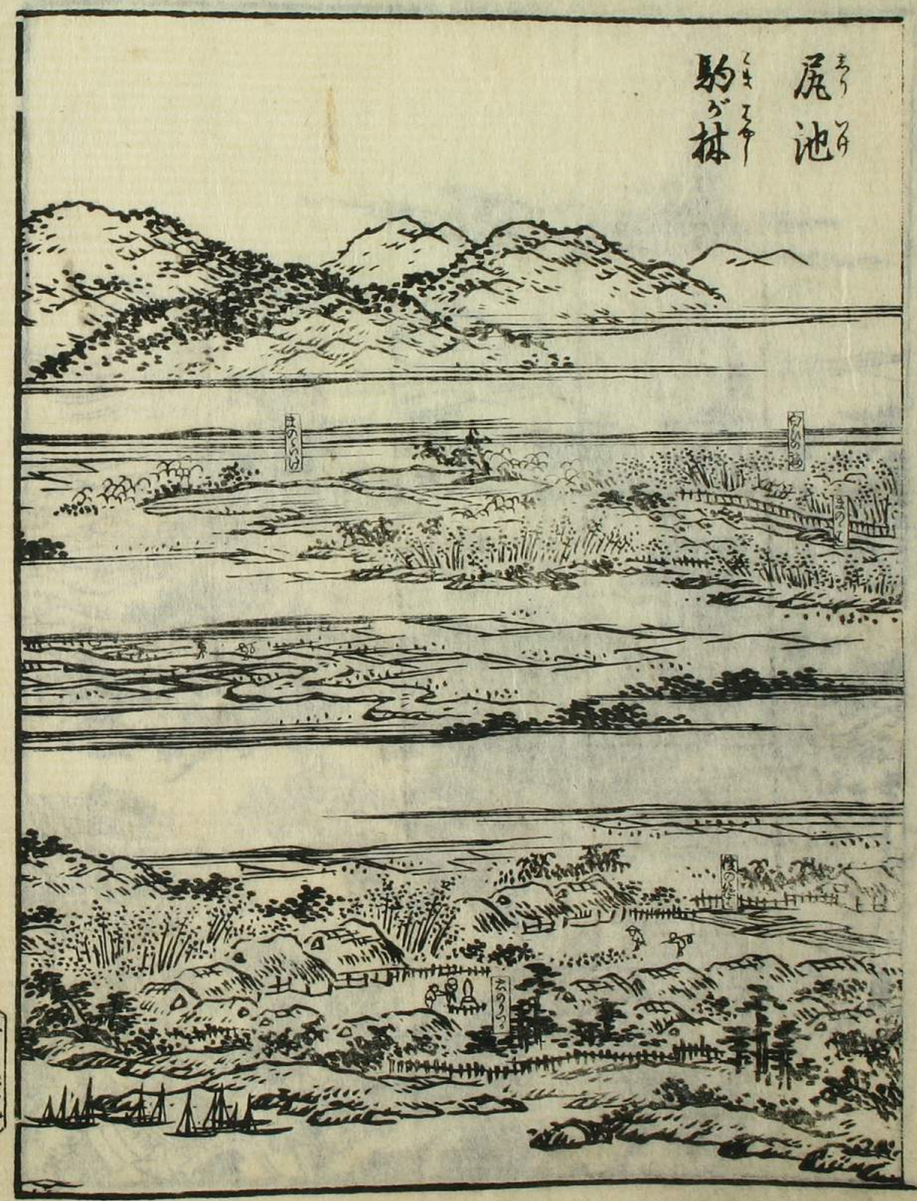
薄摩守忠度塚 駒林乃中よあり 仮ゝ忠度乃腕塚い明石よみて腕塚町

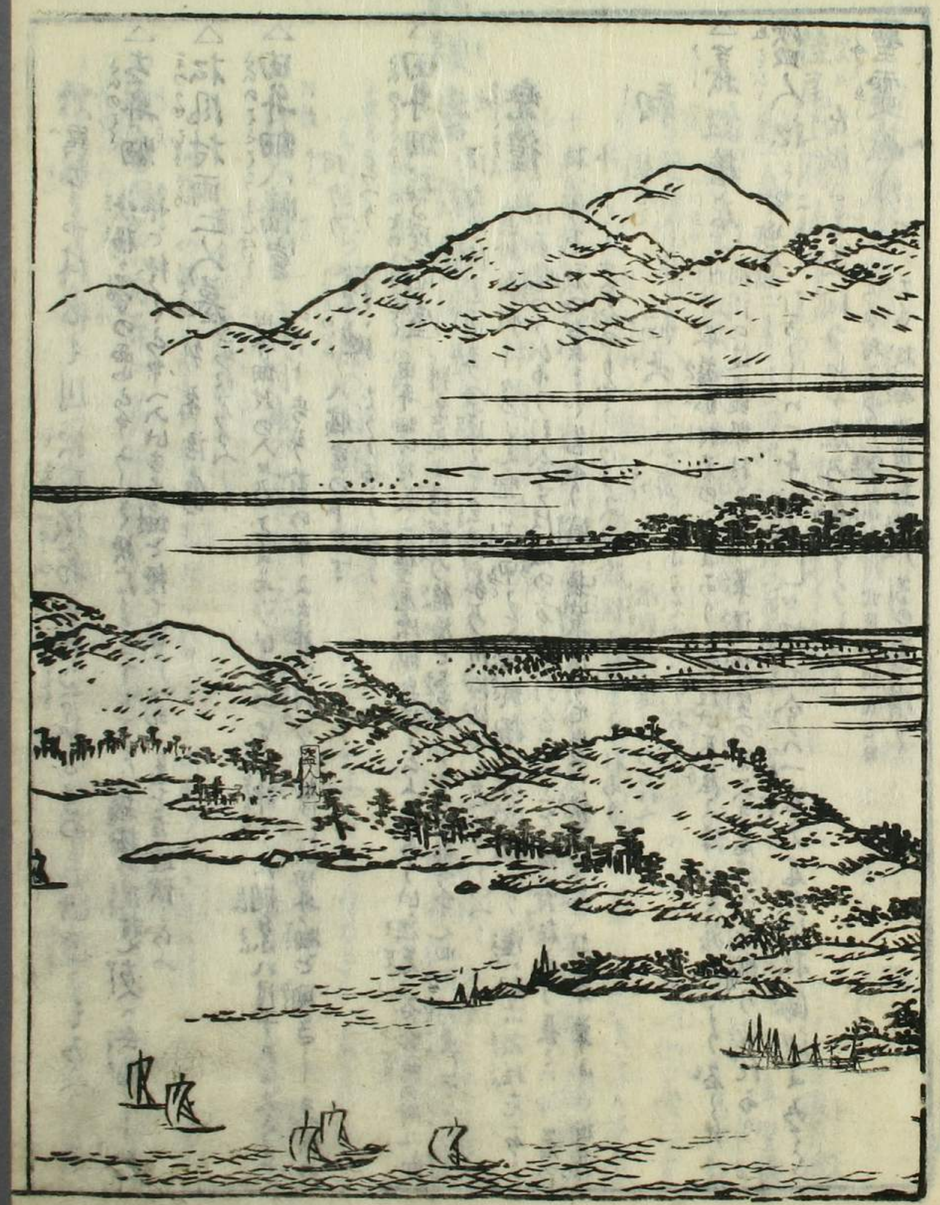
石塔と成ゝり

ともゝゝり北西のよの大ゐなる[illegible]広源広より西へ[illegible]て逆ゝ[illegible]ゝ

知章
[illegible]
教賢忠孔




尾池
駒ヶ林



異本にはなるも川淀广板宮を祈る所なるべし

△古井畑　淡路の国の西北の方十二町八反と称す古井畑と称して極広く出る所と古道説なり

△松風村雨二人墓　幼年流浪の時の

△田井畑八幡宮　田井畑村の入口にあり　の下十歩ヲ墓の中央に小祠あり　小祠あり　猿池　八幡宮の下にあり

△田井畑鎧尾旧屋　田井畑の村長久鎧尾源助兵衛と称し先祖谷合戦の時九郎判官及び梶原の陣屋と称して其の流

兜鎧　其時鎧兜一領ずつ引合せ綾の方へ引合せたるとて鎧の袖に板あり長さ八寸巾六寸ばかり

板あり下敷の裏まで色あり綾の袖に板あり長さ八寸巾六寸ばかり

外にも又変死の人あり　征矢十六筋　太ふとして十六本あり

鞆　鎧毛と以一制

△義経旗本　村を義経那村南の入口にあり義経此本陣と称し　より名付

盗人松　村田村　相浦の辻義那村より軍議評定の不入る尾張の戦場の跡

白波　むらしゝ二本あり　むらしゝ此間多死が所の名なり

聖霊　大な村よりあり　例祭六月廿日八月廿七日

大な板宮　此田畑広の生駒

糸神　熊野権現　一説に聖霊ありと称す　摂社　九頭代命　牛頭天王

桂尾山勝福寺　大な村　伽藍三宇あり享保二年文明十六年　傳法灌頂密授

名所一章　延徳三年長田神社　社僧の兎田儀永正十三年　紀伊国薄天正六年　聖霊

権現と称する文大永又年地ヲ懸ル紙和尚　一条院勅願所　聖観

寄附山浦楽上人ヲ以て其言宗之　什家ヲ弘法大師の場　扶養の本

る十六名神の像日幡十日流弘法大師の筆　両界受茶羅　其道ヲ以ヲ筆の

十六羅漢観音の釈迦文殊普賢　唐本の大般若経　本相国り寄附也

武兵守紀章の甲冑龍の玉　其外数々あり

須磨　須磨浦　兵庫の沖より西を望む　今の西須広　須広　須広　須広　須広　三村ヲ

八田部郡の四橋川の内ヲ以て　ヲ以て　義経馬の風ヲ入る

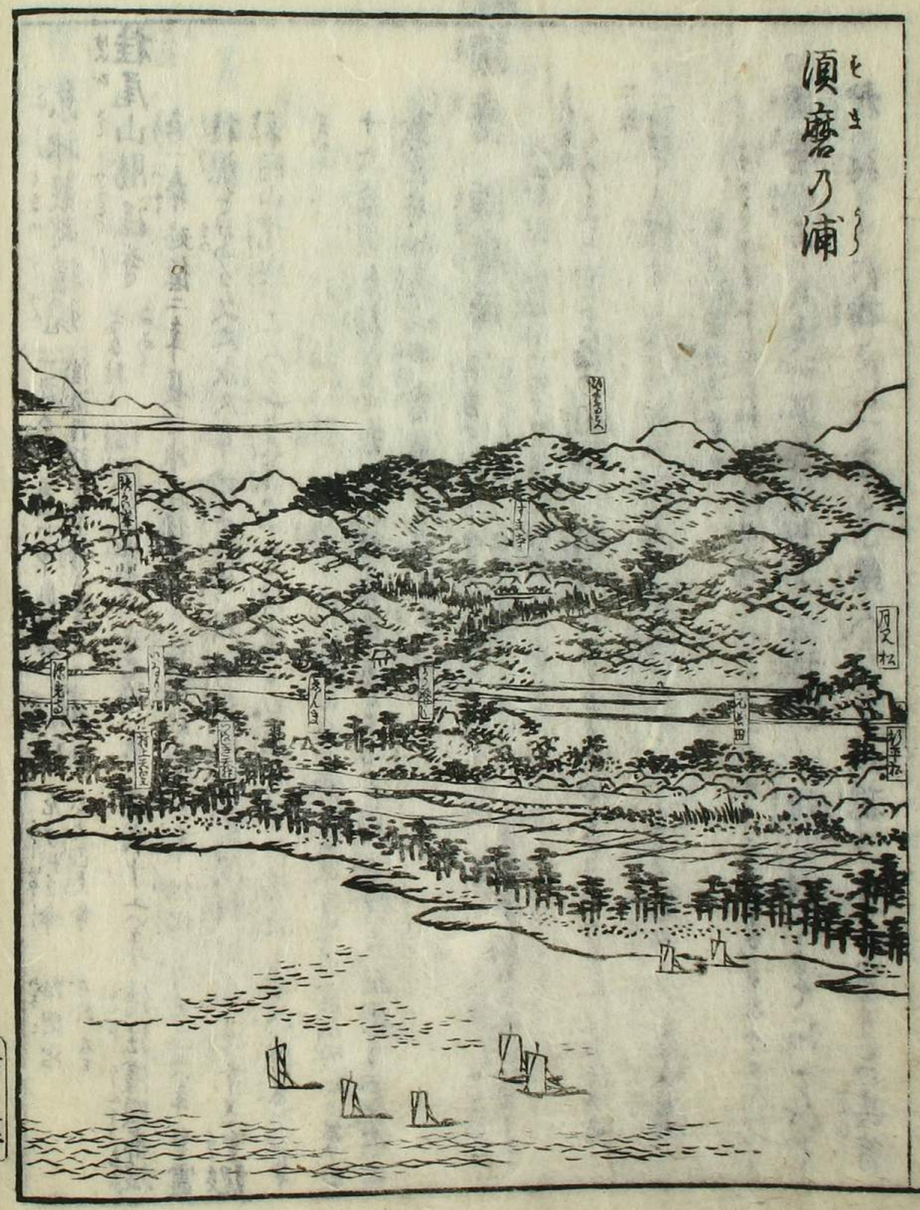
文歌集抜　ちりまちやと海の関屋の板庇月ヲ立て　やまびこ

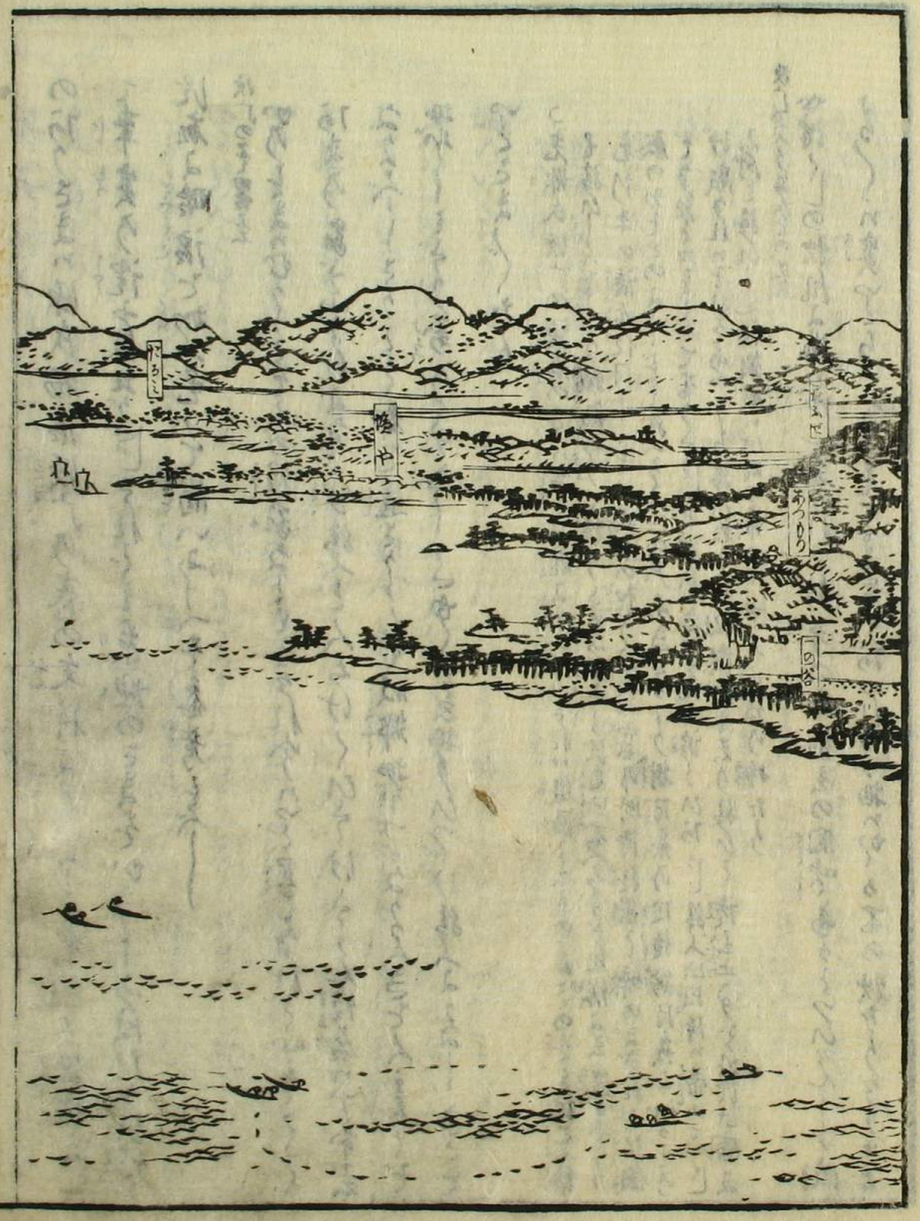
月雜　はるまつすまの月夜の空さえて忘れぬ雪ふり　玉葉後撰

高倉院厳島御幸記　ちりしの浦ヲ過ぬ何ヲ思ふ

○須磨明石の月の美景　昔より古歌多し　孫ヲ月とりて　ちりそびく

秋の月さえに掉さし一度ぶ　猟人の笛紙掉　ざるいなり　其昔


須磨乃浦



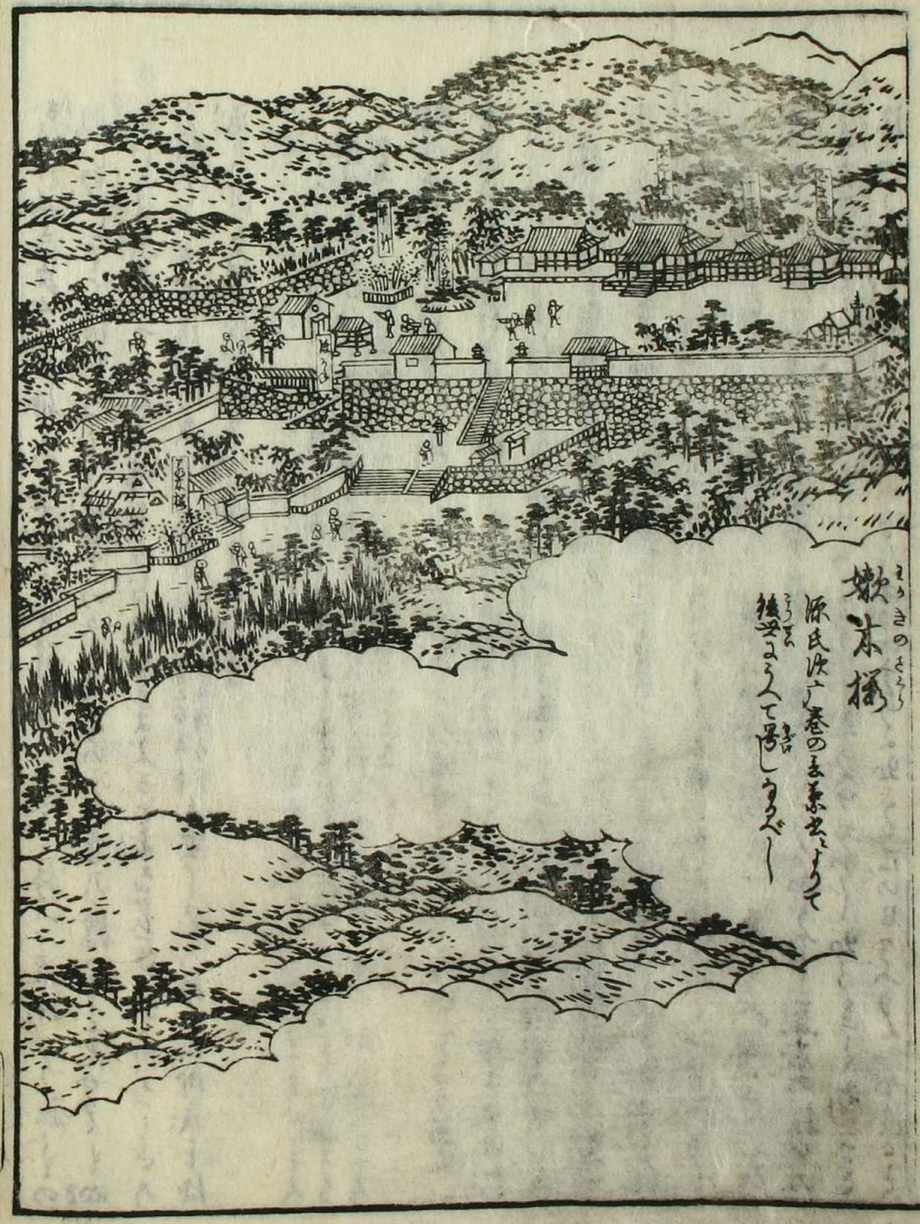
のりさまい源氏物語源氏の巻の文章よりえらべる色紙短冊は
て幸実の花の花ぶさしさられども系地のさまをかきゝ
源氏五時語と加入色えて尚いみ〳〵を参考えべし

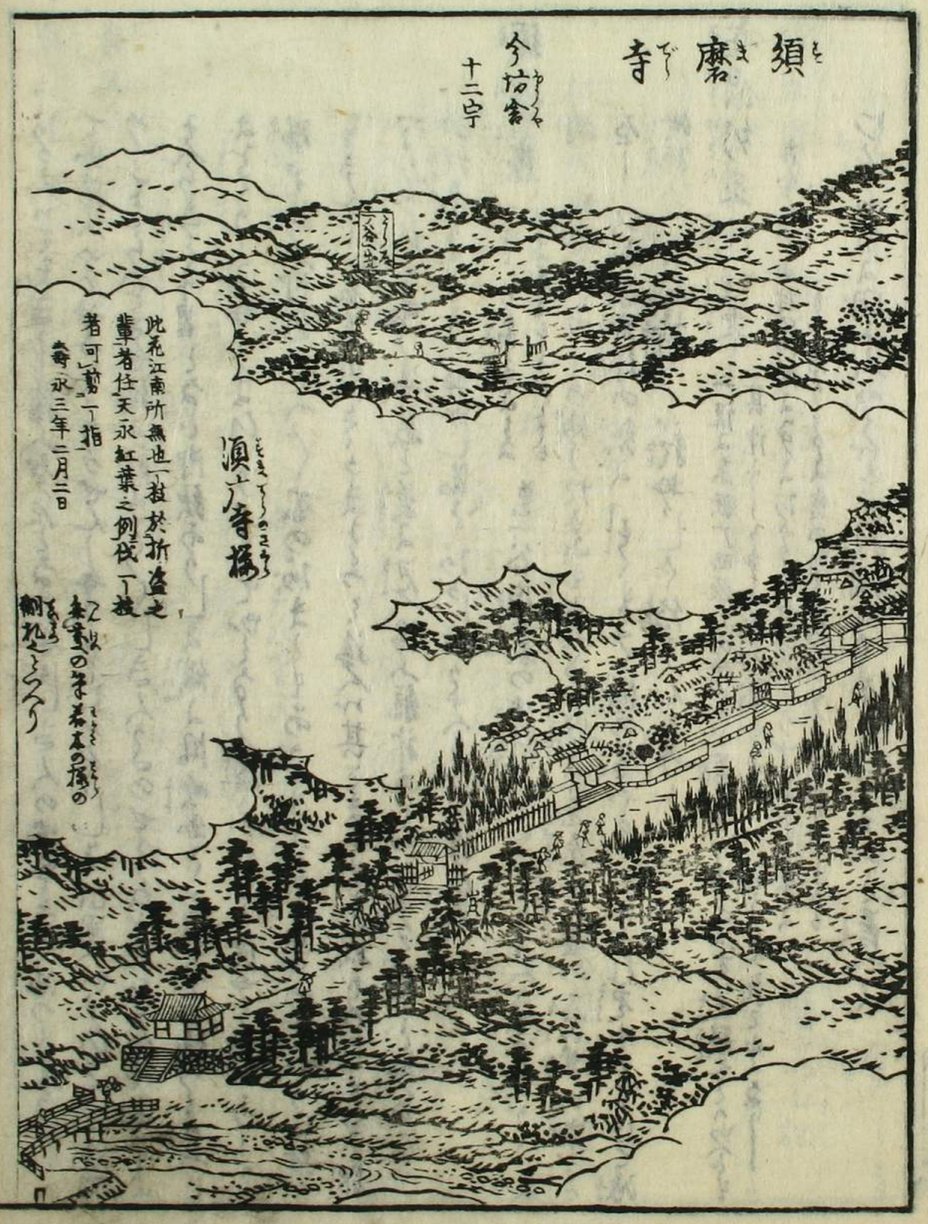
源氏の巻巻名
かりとまいむうゝこそ人の住家ゝもみなれ今いつ星をうれしく心をごとく
なまの家ぶふまれ入ぶ中ゝ人ちげくひさけさん住居いつ年表
みえべゝさんゝゝく都と遠さうんも故郷捨ぶつるうきと人まろくぞ
捨ゝゝぶり系のみきゝうきゝ世ひづけ給へうるゝきと
ゝとさまゝくなり

○光源氏源氏の満居のみい年表
年給ひゝの年ゝ動動ありて移りうる所あゝ自氏家ゝうぶ住ゝ遠ゝ
光紙年の満居にはゝさそ氏満居の紙ゝい年の宮の附御経巻く年のまぎれ入弘徽
殿のおそのみぞどゝ給へうる三の戸あきうるより御月表の内侍御月表の物ゝ
ぞうれとロとさして来ゝうし と源氏ゝきゝぶれて涙ゝひいゝし給人氏内侍ゝ帝の見ゝし
げ殿うれがそれをあゝ まち給ひぬゝうの弘徽殿ゝまり給ひく後ゝ止ゝうと給氏氏浦五
ゝうげゝ給ひゝゝ之弘徽殿ゝ氏附の帝の御母ゝそ内侍の物ゝ

源氏ぶうゝ年ひとの文ゝ
心浦くしの秋風ゝ海ゝ波ゝ遠ゝれど紙ゝ年の中納ゝの関映ゝ有ゝうゝひんゝう波
るゝゝい実ゝとちゝ入きゝえてまゝうくゝなりれゝる抱ゝかゝる不の秋ゝりゝゝり中巻

おゝり海きゝゝれゝ海ゝやゝる廊ゝ出給ゝゝゝどゝ給ゝ中巻沖ゝり船ゝもの
風ひのしゝて漕給ゝゝゝ


嫩木橋
源氏次ノ巻の玉鬘ようて
後ようて見しうるべし


須磨寺
今坊舎
十二ヶ所
渓上人寺橋
此花江南所無也一枝於折盗之
輩者任天永紅葉之例伐一枝
者可勤一指
寿永三年二月二日
紅葉の年号の橋の
朝孔ようろう

[illegible]

須磨紀藍　西摂津の名所なり　笠一谷内裏の遠風と云へるもさるべきなるべし

浦の塩屋のいとへばかりたるふもみべきの院の荒布屋の名い芦の家なる

なしと云和泉武部の歌に「もくもく浦の名やの芦とぞ」けて海

附而云若は遠風なるべし歌枕しく侍しく侍しんもろ

在原行平絶絶事　一説に東摂津西摂津の間なと菖蒲小法と云所を賤しと云ふ

其説さまざまなり　古今集　田村の御時に物いとうとうてはのくるのすまいらんと云

こうり侍りなん宮の内に侍りなんとつかうまつる

口くらはは同人あるべきまれ浦よりかたれてまぶと書へよ

[illegible]

須磨の浦や海人のたくもの煙なびくを見て

行平月見松　東摂津の小の尾傍に古松あり　西摂津の浦の一堂の風糸此よりあり

○衣懸松　○因幡遠山松

○因幡藤師　○松風村雨舊跡　先哲皆後世の戯作なりと云へり

後後拾遺名

もしほの浦や海人のたくもの煙なびくを見て

松風村雨乃事　一谷の後摂州界の海辺　淮后親房記云　観音尾家久い賀王の

田舞畑と云所の長の美女なり　此里に松風村雨の出て有に若より

悪女なりしと云一説に松風村雨い元侯後国接絶大臣と云者の娘と絶母の海

侯より此所に離遠来りしもの　西行撰集抄　若行平月見にやまんかの

ありて摂津の浦へ流されりかうれて浦つたい有きくふるあまよいの

くるやをむと見給へど

白波のよとれるつきさう世風るしあまの子にしい者と変ぬ

とよとくまぎれぬ云光彩古今雅の子にも出しう

右の注つけ申す光　[illegible]　集抄の注信もべし　松風村雨の名はいまいきく

[illegible]

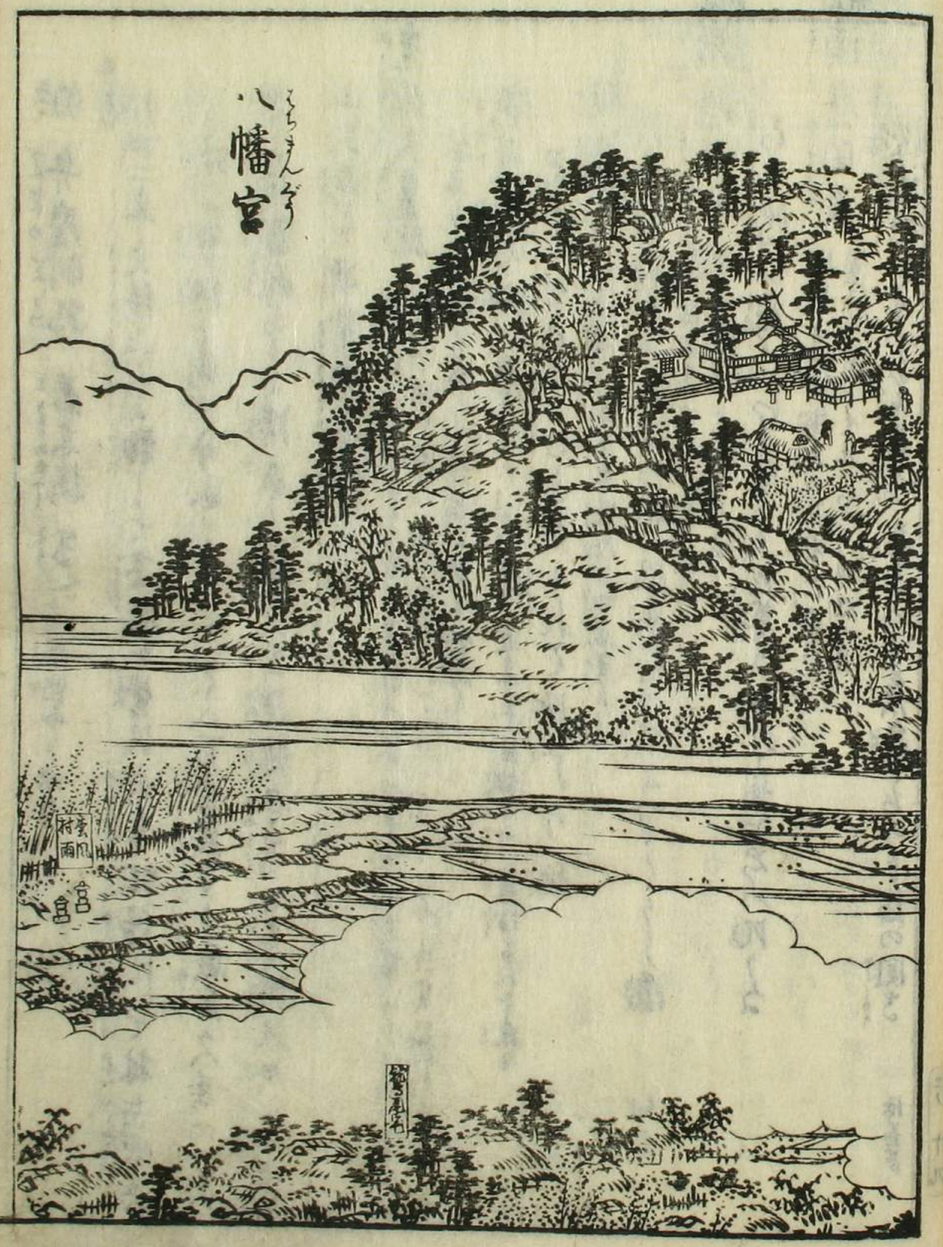
荊田氏故家　西摂津の里長の祈切皇后の御財ありし家安彩殿の摂州国なる事

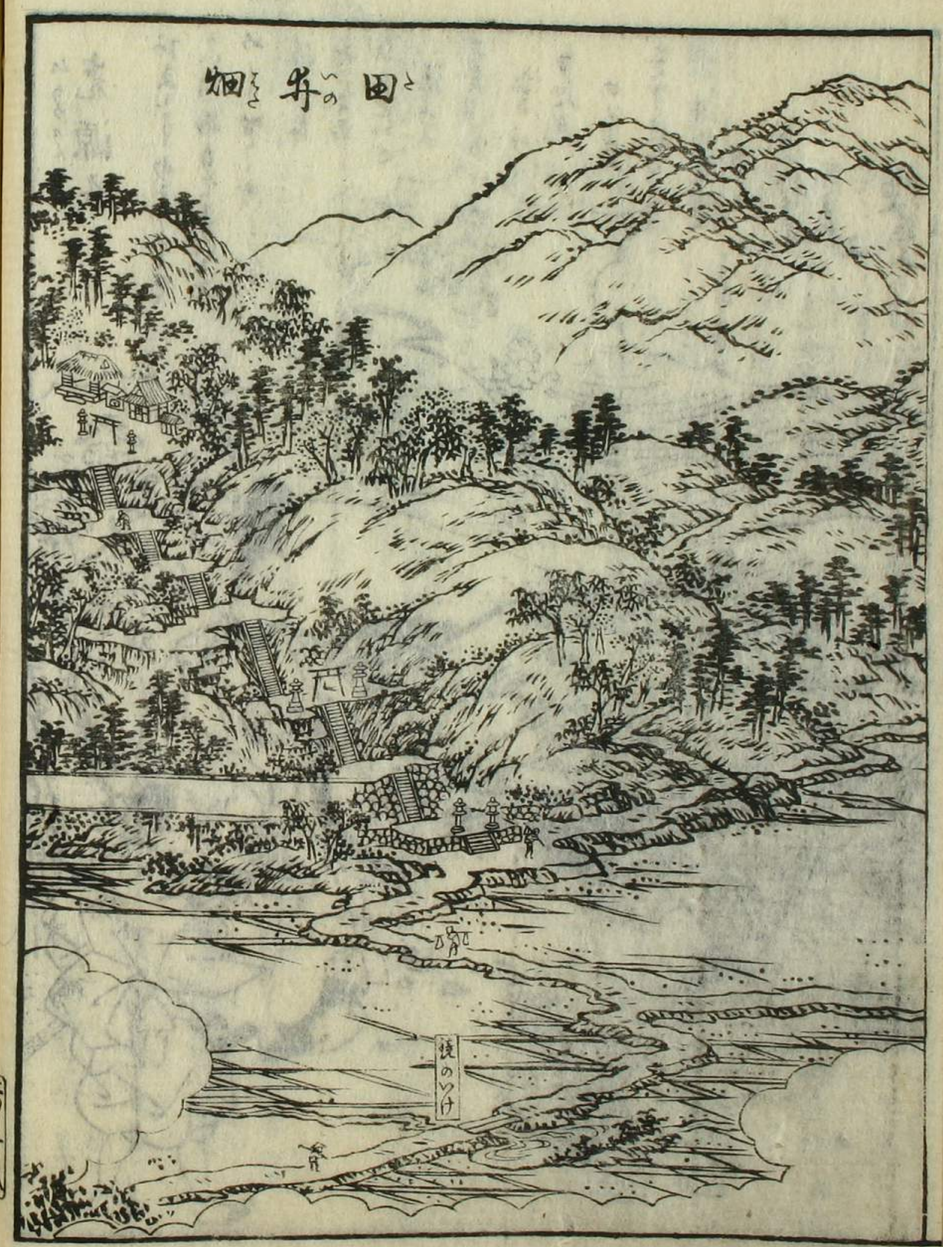
事代主神祠　西摂津不田氏の後国なり　儀式に祈切皇后の御社あり　昔皇后

三韓退治の御所凱陣より宮ゑ之ゑ[illegible]せ給い出雲国より事代主命神と迎へ[illegible]

村上帝靈験
玄人の曰むらしを以て長歌
師長に琵琶の達人を源廣
しめんとて撥上の名琴
と撥とを師長に来り給へを
村上天皇和琴壺皇女の靈魂
ありしかしと止め給へ
り御覧ぜ
名琴と
撥げし
天皇
撥を
入唐と
止り
給へと
弦上の入唐
の撥と流れ
給へり

詔あしび若田坂先出雲國より事代を命神と宮を勧請ス又まつり今の長田の神社へ遷し事代と名付くと云つゝ〜いい若田氏年古殿下の殿中の殿の三殿と称し名とかり今はをの西坂下の村の里菅之丹 日本若田氏の家載ス云ふ〜世俗人呼て清泉と称ス 菅之山市より汲〜世俗人呼て清泉と称ス


八幡宮


田の井畑
筏のつけ

笛　弁慶制札　若本橋名　右縁記あり略し

寺地記曰
仁和二年文徳上人よ勅して宮殿を造り丹青彩色して林岳頂に
〜遷し梵刹とゆるの今ようるん〜八百余歳ゆう殿后久寿のころ
源三位頼政ちよ帰衣〜殿堂ち造鎮守名と奉仰し御ふ拙いて
山川色を増霊感益燭ちりう

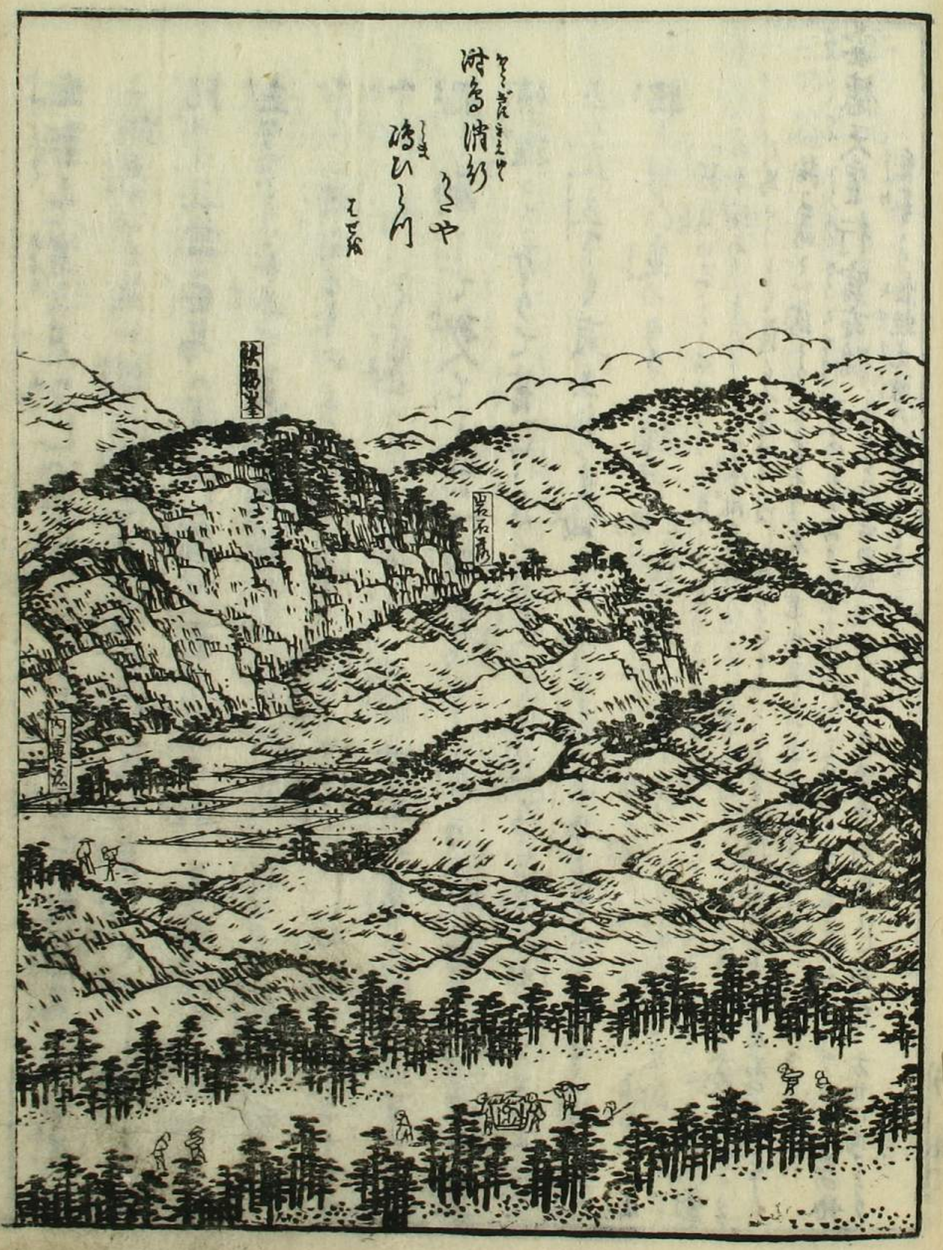
名所
光源氏舊跡　源広寺の西南よあり源光寺ちと流通場ゆう山城とふ
つくも源氏物語い紙ゆう双紙ゆれいたるのみ〜くしまつ〜実い現光寺ゆう永
正年中建立のゆ場しそ什物ふ陣ち紙あり
芭蕉翁句碑　源光寺の門名ふあり近年建立後俳士芳蘿坊ちれと建る
見ぬさせばねがむもてば〜れて源氏の秋　芭蕉
風月菴加雲跡　源光寺境内ふ四庵遺ちり
月よりけ源広の上堤の秋の風尾花の波よつくり〜浪　加雲

名所
須磨浦江　源光寺の西ふあり源広の田園ふ沿りて名のし遠ちり今い
ちり源広の陰りはるうた尊うきゆふ拙とちふ此うる

名所
須磨園屋　源光寺の西樹石の左右ふ一堆の
臺あり先とそ沿ちり俗ゆ
俗語かよ〜ふ名の唱ふ夢よい〜夜風ちりの上海の関ゆ　源重郎

名所
須磨浦屋　今い焼ゆ白さんを右ふ蓼焼とちりあいりの平の盛の怪やきも流りふ明石ゆ
西ふ海あちりうるびはゆ十年ゆ天とも白ゆ〜それふ絶て源氏西の方へ移ちりはいふ
すま人の海べ岩さ〜ふ焼塩のうゝき恋とも我ちとるかも

道羅川　源広ふ洞ゆ流る関屋　○村上帝霊蹟　ふ名川の西り湾ふあり上ふ小河あり
四流西ふ流中橋とちり　天皇のゆる霊をまるかりうとそ
一の谷　山谷長さ正丁余撰二十間谷口ゆ波打際ゆ六十間ふ余二の谷〜ふりの名二丁ふ十
間余谷ふ名ゆ〜源氏の地方ゆ生古戦場ふ〜〜ふ名ゆ人〜〜幻住ゆ
平家山ゆ石〜楠麓幸い播磨国室山城中国水源二ケ度の合戦ふ討
陽ゆ其軍勢十万騎ふ及びぬ上ゆ本曽討ふ安てゆ溪流国
八幡ゆ漕出〜拷浦播磨の奥雛波浦一谷ふ麓ゆる赤い生田の森
と城石ふし西い一谷其中三里い須磨板宿福原兵庫明石ゆ海岡
ふく續きゆり此一谷いロせ〜ぐく奥い廣〜南い大海浦〜〜ふ多
小い深山城〜ゆり馬ち人ち通るべき横ふそゆり名海ゆ住兵船
数万艘浦〜〜陸ふは赤旗を其数とゆ〜ふ吉風ふ吹ゆ〜〜天ふ
翻ゆ　○坂落〜い寿永三年二月七日ゆ曙一谷ふ攻麓ゆる
平家の陣を破らんと大将義経三ふ余騎鵯ふ打ゆりて


滝多清幻
うさや
滝ひしゃ
こ
巨石屏
内裏公

一の谷

城郭を遶る足下しいで試んとて、深馬又足駿垂馬三疋を為れ
ば駿垂なる馬に紙にて足をぐる馬に先とぬり笑打て中より側にて始
紀名又駿垂馬に美麗しく城中茶司が屋敷の茶に対ぶるしてそ
五名りてくをれて義經備ねる示して日抑のが侯なる深馬にかくの
ごとし動あるものを私なるかく金し心得給ひしなるやと
下紐を解くるに三十錢斗垂念垂れ落れる二丁だろう
泥と落して抑てくれば一段臺のごく平なるあり夫より嶽
傳推のさなりて苦しくうり其なるてはいかに通ふ人もとくべ
上に直なる下も直なる彩も陶るもつてくれば有きとそなる俗なる美
晴と思ひ定めなる

評曰 陸奥の有り物なるの大両垂なる流を埋して九丈十尋ばかりの
一騎駿の有り物なるものなり何ぐもせよ垂なる板なる所なる
の平場ありそれより下に屈然をなるごとし然るに今そなるなるの一段臺
人馬なり落を人きゆうなる一騎なる流れ流れるなるべくに不あり
一騎なる流れ流れるなるべくに不あり 又谷のよりなる嶽なれ二三十間左右のなるなり

安德天皇行宮古跡

官者なるう紐免除の地なりなるそ

二の谷 此谷長さ三丁外横八間なるさ九間谷により波打際すぐ
巳十間余三の谷小なるなるまぐのなる二丁余をなるぐなり
三の谷 此谷長さ二丁余横九間なるさ九なる谷口 鉢伏山 俗名なるなる鉢伏山 嶽
なる波打際なる千間余なる巳丁余の間なるあり 嶽明なる
種懸松 一の谷の 近年古松に接て今に抽絶なり古松の株と切て紀板なる 茶田氏の彩揚
狹弱峯 一の谷 ○一説なる毒の男なる城戸なるのなつひなるべく名なるなり
鵯谷平山一二の鵯 三の谷の西なるあり 鵯谷平山 搦なるにのなるが鵯谷又先陣とせんなるく異の物と
して古道と称て一の谷波打際なる出なる西の木戸なるなるなるて一の谷の先陣なる谷のなる
鵯谷なる魁せなるなるなるしなるなる鵯谷の先陣なる城戸を開なる平山に搦なるれなる城戸と開きなる
紐八なるなる九なる二二のかけなる平ひなる

大五輪石塔 俗なる敦盛の石塔なるなる三の谷なるなる紐選なるあり中に古なる埋なるなる
平家物語 谷崩なる城なる蔦なるなるかくれなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなる
安宮古文敦盛の清盛の弟經理文經盛なるなる一谷なる蔦城なる張
て只一騎文の私と志なる一丁許なる洗なる流なる流なる不鵯谷活
即直突こしと拓き磯逸なる戦なる馬より紐で落ち絶なる敦盛と是
て押へ首を切んとして内甲を見なる十又なる斗の若なる爾蔦化粧なる

大五輪
石塔
或説に曰山塔い
戦場の石塔
みあつめ
陸奥
寺奥
時うんと
建て卒
家の士卒
戦死の
冥福
のため
をこめり

扨又今
山塔の茶を
ろろ人下馬あるひい絵を
仰ぎして恭敬し礼をなせり
是い何の故なるやぞ
山陣石の上い安徳帝の形
宮にてもるうちられより
知れも安さう表其茶元
但し一門の墓塚い戦場の
不しこ弔せりもろふ
敷墨の塔を剛も遠恨
なるべし
因て姑く俗よ
志たがひくいそう
其侍を
治記し

畏川

秋猿こゝを押ひゝく谿谷心弱くして秋ごとに年々ふる孫につゝまれて

し助け進ゝせんゝは思へども道を絶ふるを御身ゝ沢御書提とび

芸実猿く訪ひゝべゝ母の慈しみて御境せよと用と塞き歯と喰合

せく涙と流ゝ御前と撫沢平家の人くゝ討るゝとも情とゝとて沢

さうかうしき漢竹の笛と香もむかしき綿の袋に入く襷乃

引合せこゝれうまより後弥勢心ゝて蓮生坊とはるまう後馬

襷笛ともみ前と乱流く又須盛に送られ々る

一説に熊谷傷くゝ山附の故わ沢又曰前い六条室町の墓に行ゆ十三回

八条河原に埋ゝと東福寺に見へうり

○又蒙の小郷村に和尚あり刻て曰永八年建る性氏い詳なり沢

按京使資賢卿のむすめ玉藻の弘法に祐寛に加持させ

孫ゝ彰義光寺御祝の儀に一院と建く蓮華院と号ゝ住り一旦後鳥羽の寵

法滝王阿に人魂のくゝ内しゝ有ありて石に拍の扇を制ゝ祐寛に加持させ

上人の魂恵とゝ所いしめられしに絶てあて来ゝ寄ゝりとて

御教ゝ元櫃林に石の剣達たりしゝ玉阿より時常くゝ来りとて

三の谷より西丁に有ゝ岩ゝ歩まうゝ川中に絶示あり光摂津三郎の国男に其後示の

沢に祐寛と入三本の釘と打迫滝国る石橋とし海上漢鏡の墨と刻ゝ山川街に

を要さて西い播州塩屋村へ八丁に山滝国戸より十丁里十九丁

播磨國い山陽道八州の首にして古は飾磨郡より西を升岡の國といひ
加茂郡多賀郡を路の國といひ赤石郡加古郡印南郡ことと別石
の國といひく三郡の國なりしを後世十二郡よりして播磨と名て一國の
名となりしなりまたいくの國号のなりい

○張濱 文已美る麻生山より見て張弓のごとく國うれいなく云○右三家俗
名石神名の 時榛の本生ん 濱の浦正義なるべし又彰孝流抜ノ神しもつり○ことは八一の異名なるべし考る國
中不くの郡名は大抵縁因稱生の義なるべし只書紀に播磨国稲生の義なるべし尚ほ能く撰磨郡播磨国郡名
まつくの書紀に播磨国風土記に細かなるべし只書紀の所なるべし尚ほ能く撰磨郡播磨国郡名

○晴岡 神功皇后森雨嶋なる ○榛原 あひ狩しかるんべかるべし

梅ヶ塞 淡路名所なつ名なる低して 塩屋 梅ヶ塞の西にあり 薄野 塩屋の西にあり 猿頭坂 布施畑村の東の方
岩のうへに二株の梅あり やきしあるんべかるべし

てようくまもしたれ 塩屋村より北東丁の中ほどに 奥畑佐藤氏家 奥畑下畑と称す淡路氏家の威勢力多分此屋せしと云者
山海産用の切あり 奥畑村の西にあり源義経三草山合戦より搦手山田へ下る 奥畑村獅子彫之祭と云者
此村の田の中より得る所なり 淡路石 淡路石の石屑に年と称て
和合〜元付合〜まつきれ〜 日村の森よりて左大樹なり 飛鳥山本の方へ抜き代色考せ

△奥畑佐藤氏家 △本蓮石 △妹背松

△大山寺 人皇東坂年より 天台宗僧坊十二宇 洛陽壽蓮院末 本尊薬
二里半良よあり 師如来仏十仏代元正天皇の勅願として大職冠藤原の草創開基
恵和尚也又霊亀二年藤原の源宇合卿此所内六ケ所に薬師六軀
と造て当寺をはじめ合せて七佛薬師の道場とるせり 播磨寺 一山に弥勝の地にして岩屋に諸る人絶るなし 武蔵
清水寺 祈願寺 播磨寺 長谷寺 奥京寺

をうる者い籠堂に入て勤行を不怠又境内に料理茶屋軒を元より
精進して庵丁甚よし 山岳の地〜 二王門の前に小樓閣のごとく家居に甚奥ふり

△若集滅道 二王門より二丁 俗称ふる若此坂を例也 さて実に拾て為ふるべし行社と
その坂なり○ 此坂を例也 ふたが神仏ともに

△力人重五右衛門試力跡 天正の比林信の人重五右衛門と云大力の者ありて尚を力と
此薬師に祈願の日其力を試んとて二王門の柱といざたらげて抜礎の上
に所本をれてはしたさうり今に其痕あり

垂水 きき水 西ふる東る 溪の東きをへ 此間西ふるに東ふるとして二村に分れて東ふる
ふ乃湧い海涯岸に出て于潟と往来を此岸に水のさるく変三石
あり一を弱捨の滝一を押ちう滝一を拙ちう滝と称す是俗の呼ぶ

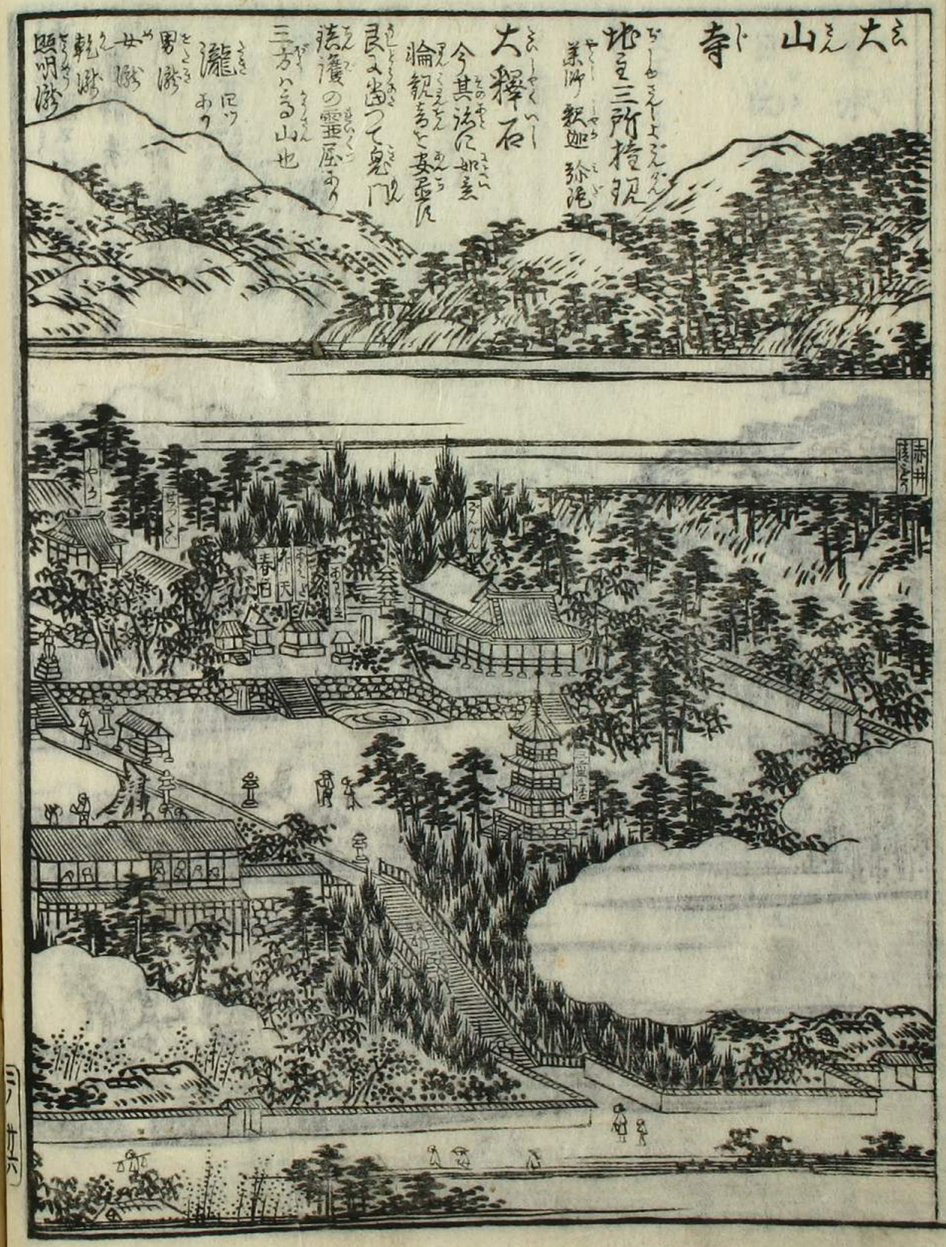
垂水神社

日向明神

夫本 垂水の神
をりのぼる人のゐる
家ゝも
かゝる
垂水の
紫の玉垣
後世

按るに神名帳に海神
とあるゝハ是ワタツミなるべ
し即信吉の表中
屋の三屋之日向明神と
出るハ小戸橋の
國名なるべし

源忠國云より二石余の
祭料 秀吉云 神領料
として御寄附の
ありし
其山撰擇
なりて撫育
後世なして撫育


大山寺
地蔵三所権現
薬師 釈迦 弥陀
大釋石
今其法に姫を
論観ると妻恋に
良て岩つて鬼門
法養の霊屋あり
三方いろる山也
瀧 にあり
男瀧
女瀧
乾瀧
照明瀧
春日大明神
三重塔
温泉寺
新井

山上
鬼隠
観音
白河法皇所幸
後宇多院幸
大塔宮幽居
されば所寄所の
佛像経典
調度数々
皆来
摩耶谷
温泉 二里半 西南
大蔵経乃所
宮ノ会乃所入湯
入湯谷
あきやま道乃
乃坂と
麦湯が
坂と
ふ
大日堂

玉にして古名ふたつに垂水いひしをみて諸國より名を呼ぶ皆水の
涌くゝるを以て近世に水利乏しくなりし故水の流るゝ所にて名のみ
残りて故ふるは海辺の用ゐる処なり
出るの義にて此地ふたつあり式内
垂水神社　西たるみとあり式内　日向大明神と称す　神名帳海神社　三社　例祭八月十又日
千坊谷龍華山薄法輪寺跡　赤たるみ岩の上にありて大伽藍坊舎数百ありしと云ふ
今其遺址とみ坊谷とよべり　今の白しは獅の内三千余丁ゆゑ寺号古佛ねぶたろう
遊女塚　西たるみ郷百人家の者にあり塚上に宝篋陰陽あり俗伝に云遊女の死跡なりの説
人竹村より番江にの遊女なるゆゑ難しゝ其実を考へべし
又一説ふたつは大坂の遊女下関へ移るに此海に溺死を流す此塚と墓くゝ
千壺　遊女塚より一丁　一堆の丘にありて周囲を天然の陶壺数百ならん
車輪のごとく埋て数重に出ふ〳〵の荒陵にて諸國に此類
多し既に出雲國姫路の道國分寺の東に震の日ふるゝの周囲
に壺ありて車輪のごとしまた日國加西郡玉丸と云る所に塚ゝ物
千壺みな車輪のごとし　又案良より西三十丁許に神功皇后の渡りとて拝宮と
称ありて人怨をて祝て近ゝ所に賜ふ

壺ばかりまと埋り数あり
都は方に地色あるべし　○日本紀垂仁天皇三十二年殉死を禁じて出
雲國より土部百人を召び埴を以て人馬及び種々の形を造り生
る人に易て陵墓に樹る後世の法とす後世に出土物を号て埴輪と
又立場と号く云
此説は久留米城下の郭外に人形川市にあり人形は数多偶人のごとく外側にあり
其大さ尚人のごとくして其撰術巧人のごとし此外掘出る器物多くもあれども今殘るのみ紀
垂仁紀に殉葬を禁じて埴輪を以て葬る石人石室のことなり
石人石室のことなり
○一説に山城にあり仲哀帝の別腹忠熊王を詐て造る事とあり是
を日本紀神功皇后紀に三韓征伐の後帝と筑紫に崩ましける
忠熊王是と害せんがゆゑ天の漢と造ると称して播磨に出く山漢を
明石に造る小船と編く明石の浦より淡路の岸へ直〳〵甚為の石と
運ぶ其人毎に祓弾て是らせく皇后の還ると称てり云
按ずるに此説は一説に仲哀帝の時に紙壺を造と称て駆使
俗人しかるべきけれども仲哀帝の漢と河州長野にあり
の壺の西より摩耶の渡の西までの名りの後を辛紀二十又巻に猛毒明石浜人烏滸
て漢を抜て国て軍ありと云く猛烈勝しく恢あり

烏崎

舞子濱　たるみの西より巽より山田村との間　京西十五六丁南北五六丁の松林なり　此地古歌多くしい名石あり　今は非ど
さんしも名高きの天下に聞へたり　色正よ砂色松の翠と物と異なる
名所の砂い雪より白く数多樵の松と高低多く樹と名付て其よりて
枝乾屈曲をの活り足不ありて素のまゝ孫に深くして蹈の毛のごとし
いとまなる砂尾と弦のまゝ人もまた色と一度して獨松林の崇べき者
岩家　兼よの濱海なり二三丁ゆのうりつき　間に一百斗源さ二間余高こ一百
十丁ゆの石奥の景にあり其数三十六ヶ所　十六
計まて大小あり多大石とかて造る屋根い二間余ほて大之門に一段低
く入まり先皆いつ〳〵の墓〳〵去よ堀立たる物雨露よさうれかく敬
もの也大石の人家なるゆえ流い風甲〳〵況不〳〵況数〳〵
山田　兼よ大蛇谷の　平家物語高倉上皇厳島御幸還御の記又日の日一天晴
るり村なり
海と長閑人多庄御石の御船とはじめ第〳〵せて人〳〵の船と皆漕出る雲
の波胴の浪とかけ漕き給ひく甚い搖磨國山田の浦よ是せ給ふ云云
吉祥山多聞寺　鐸石山田村より十余丁ゆ多聞村よあり　天台宗開基慈覚大師貞観年中多創也

本尊毘沙門天　○当寺及び此近邸御朱印の伽藍地は表の上り鬼道より入
法の有り河の北より北まりしやもの〳〵此寺領の百姓を級の尚る松の数十人
兼年十二月まり清進堂〳〵甚日書山門より一山の僧徒堂よ系集し佛菩
よ方燈とかけ漢徒の中刻よ多れば内陣より大小の古敬法螺法螺と打年十
四天〳〵世多まくの男多十人むう天孤よ出立見証古敬の席波急よ合せく
樹伝打合せて急拍子〳〵知れば内陣より又その大鬼又人〳〵〳〵出るこれを
見て小鬼いろ〳〵よ逃去り此大鬼の面い三尺斗り〳〵甚古物之外体
もて鬼飛とり〳〵〳〵に白幣帛　幣帛　滅大鉅史拾杖多〳〵拾て小鬼を
追ひ〳〵て後鉅史帛と打〳〵て堂内を踊まわり〳〵は凡猿の群集敬
人は多小猿滅とあけて稚〳〵〳〵罵甲潮る色彩〳〵笑て散〳〵
大蛇谷　元明石の駅之先より王子まくい紀伊甚出村なり　○武之往古諸國より屯倉と
〳〵〳〵朝廷の正税を蛇る倉みなり若此義の始し不知やなるべ〳〵
凡雅集　旅　世の中さいか〳〵俗なる旅　とて大蛇谷〳〵〳〵
今むかしかさはつかしの浦なるまで時中〳〵我世のひとの　長大納言
捨遺愚集　旅まく〳〵いく〳〵とび義のさあぬらん世のきくの大蛇谷の多かるべ〳〵　為氏
　　宝歌

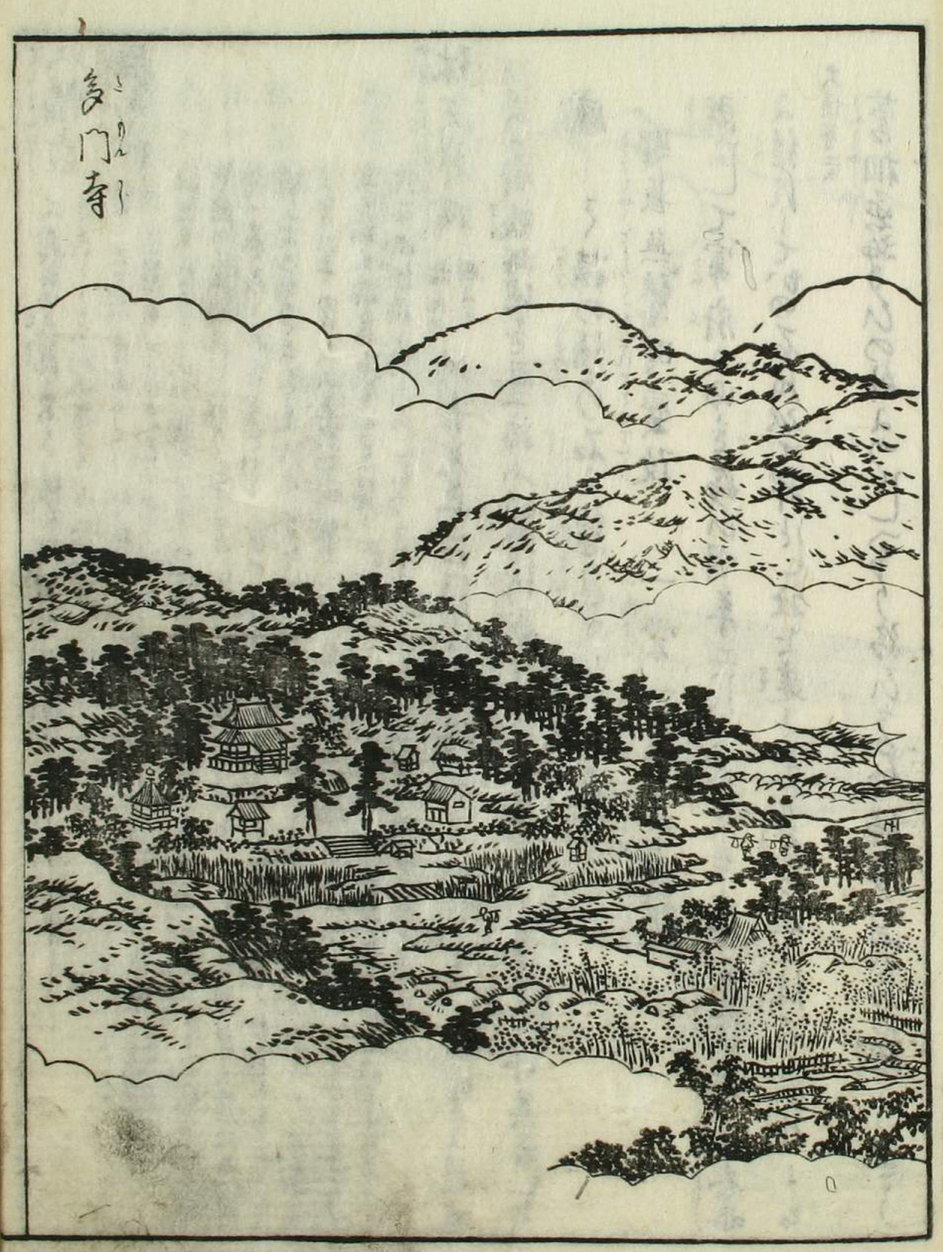
第五濱

武云第に浦治と
撰さつり後ゑ小山
つゞき其間ゑ隱沼
と志り浦海南方
の風ふるふ映こし
て本ぐへの宮と云
後の山ゑ此墨とふき
しねよく生育
の理と得るゆ
りや

源貞世 道ゆきふり
明石の浦い沖ゑ志濱
り紅もけちめ見え

るゝちしく雪紙きさる
ゆうるゝ人ゑ緑の松の
しゝまりしく
濱風り
うびき
うれうる枝ゑ
白雲坊
志ぐりて
ひゝく
うゝそり

桑子の浜より
波浮港を望む


多門寺

傳法輪寺

八幡宮　大菱谷の東端にあり　俗云鍬智菩薩の靈と称す　弓矢神と崇敬し　山ふかし　祭神三座　大山祇命　面足命　惶根命

稲荷神祠　大菱の祭神なり　印紋　角切角　三の字　社記云人皇三十代推古天皇の御時　中國の三狐明神とへりて功あり　即三狐明神とて小祠ある例なり　九月九日神輿一基　幕　神宮　大の字　大菱の祭神なり　鍬智菩薩　弓矢　神輿　稲荷　稲妻　稲穂　稲荷　稲荷の西　延喜元年正月　宰權帥　大宰府　大蓮寺云

菅相丞御ひの外ようし

活ひなるふむまやの長いにしへ押人歌〻きと所遠じて作り給へる云云
源氏法ヶ巻ニ源氏明石へ出給ふ時の言葉
むまやの柳さよ白詩とうもとる人もみな〻ほして柳ちとまりぬるく
うん柳ちえ〻り云云 先皆菅原の篠亭の駒のすとつり尚明石の帰巖所廟の流れ
帰巖集に見へさう爰ニ墨ル

忠度墓 大発谷の西の札場人丸の石標より 石碑大小二つあり小碑前の塩竈
右の方へ入ちにあり忠度所とよく

源忠國郷の和歌ひろ

ゆうれいでのり社ちにしよ殘る名のこけよきざめる名こそ残せね
其番い遺嶺と柳さ所しに松とうとうとそ大碑い帰巖所文帝ニ席ニ帰巖い明石
儒医栗田寛右傍門諱邦美とうとう 文い文集ニ載りくくこ墨ル
腕塚 忠度墓三丁ヲ小浦土町の菜園ニあり 両馬川 忠度塚より人丸ヲ人の
右忠度の腕と埋しにそこ〻より腕塚町と云 ヲよある細流ニ出り
柳本人麻呂社 忠度塚より三丁ヲ小東坂より入る西東西ニあり東のる西い九州より建る西の方石
の傍ニ亀の井とよく流水あり先ヲ陽ニ山門の新い宝塔寺理表石云の事ヲ
本殿長七丁 柳ち勅詔の年月い詳ヲ〻ル尚社とく小稜を元和の比
明石の塩竈ヲ〻柳ちり四い今の塩内の地ニ移りて軍記人丸塚の戦い拓
と記せり尚今塩中ニも小河あり本朝文粋 敦光人麻呂の墨ニ云事の

姓い柳本名い人麻呂上古の歌人ニ持統文武の朝ニ仕へて新田高市の
王ニ遇ひ云歌道の聖祖と崇めてかしこ〻代〻帝王の奉幣奏ニ
御制と編り享保年中西一位の猪号ヲ〻ル皆歌ヒの德ニ由ありて神ヲ
ら況人丸の俗い事法ニ委しく図く塩ニ松平信之ニ名る年雅章卿弘文院林学
士ニ見ヲ記をるくしむ社記あり播磨國半菴蠟宜書して奥ニ跋をめ
名松平信之の士ニ十九人名歯一人町人二人と記せり
○又ヲのくの歌い古今集羇旅の部ニみえく耶人丸石見國へやらる
附ヲ〻小浦より船を出せり附の事ニ見玄妙の境ニとく古人皆是と
歌英ひ家ニ家ニ社を建うり風ニ小歌の是氏解くヲつ〻へすりおの
うさまくニよ山ひしくしていまど心〻うひ〻ヲ小雑波の備藝仲餘
材柳ニ解く所其濱ニしニとく識者これニ感ひ因てこ〻ニ其大槩
をもるひ
ほのくとあり社浦のひきうに海ヲ〻ニ彩船をくそ出り

大倉谷

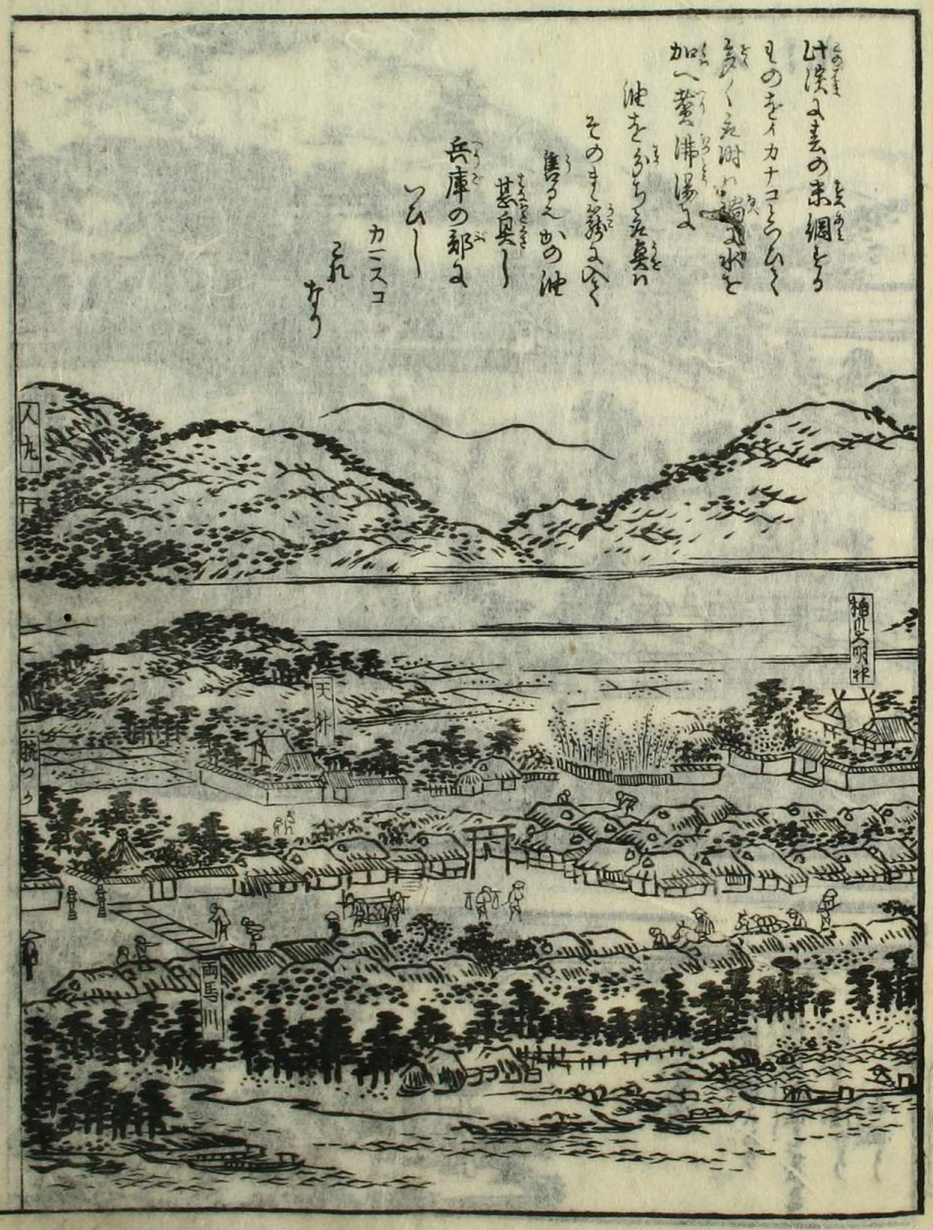
八幡宮

稲荷大明神

休天神

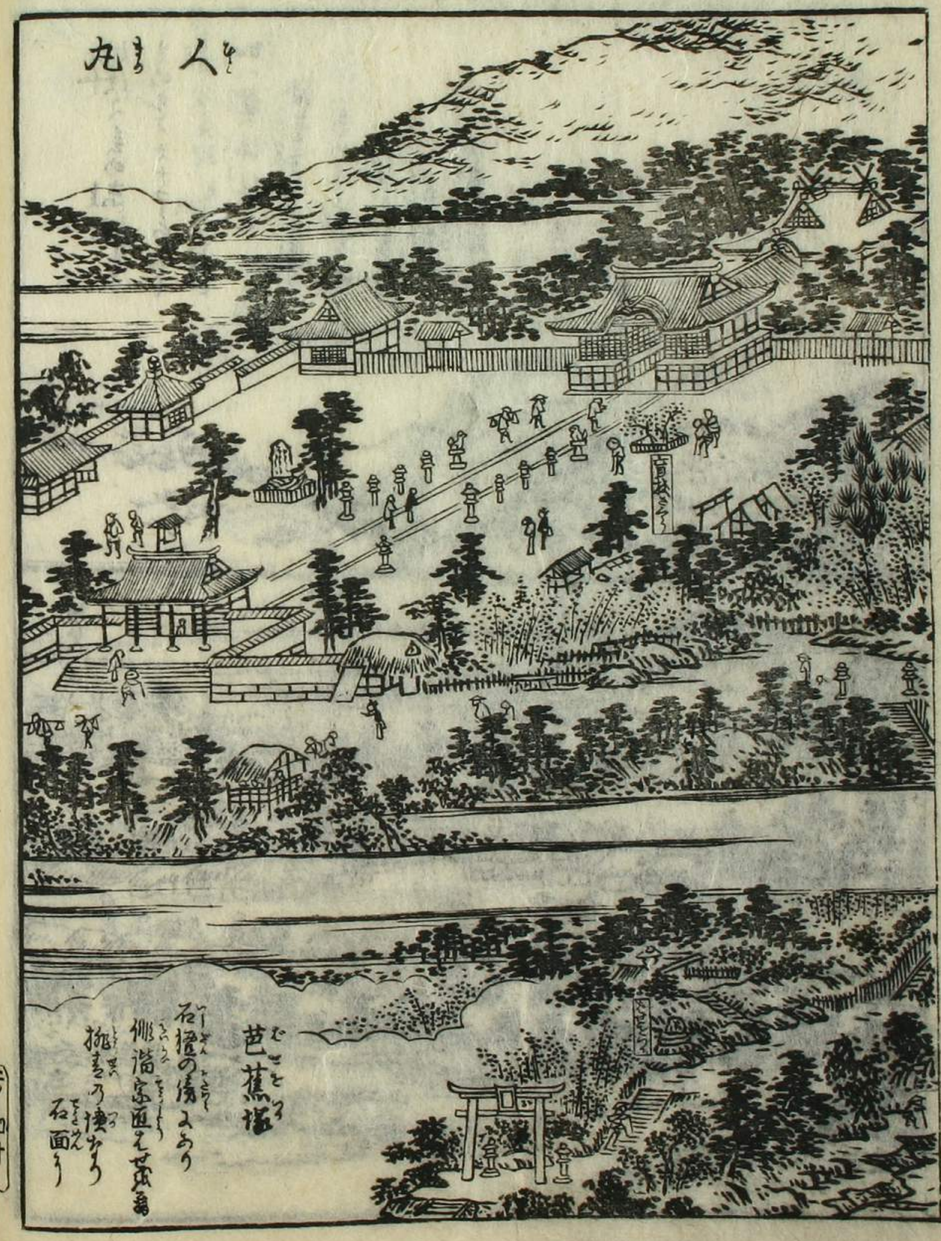
西馬川

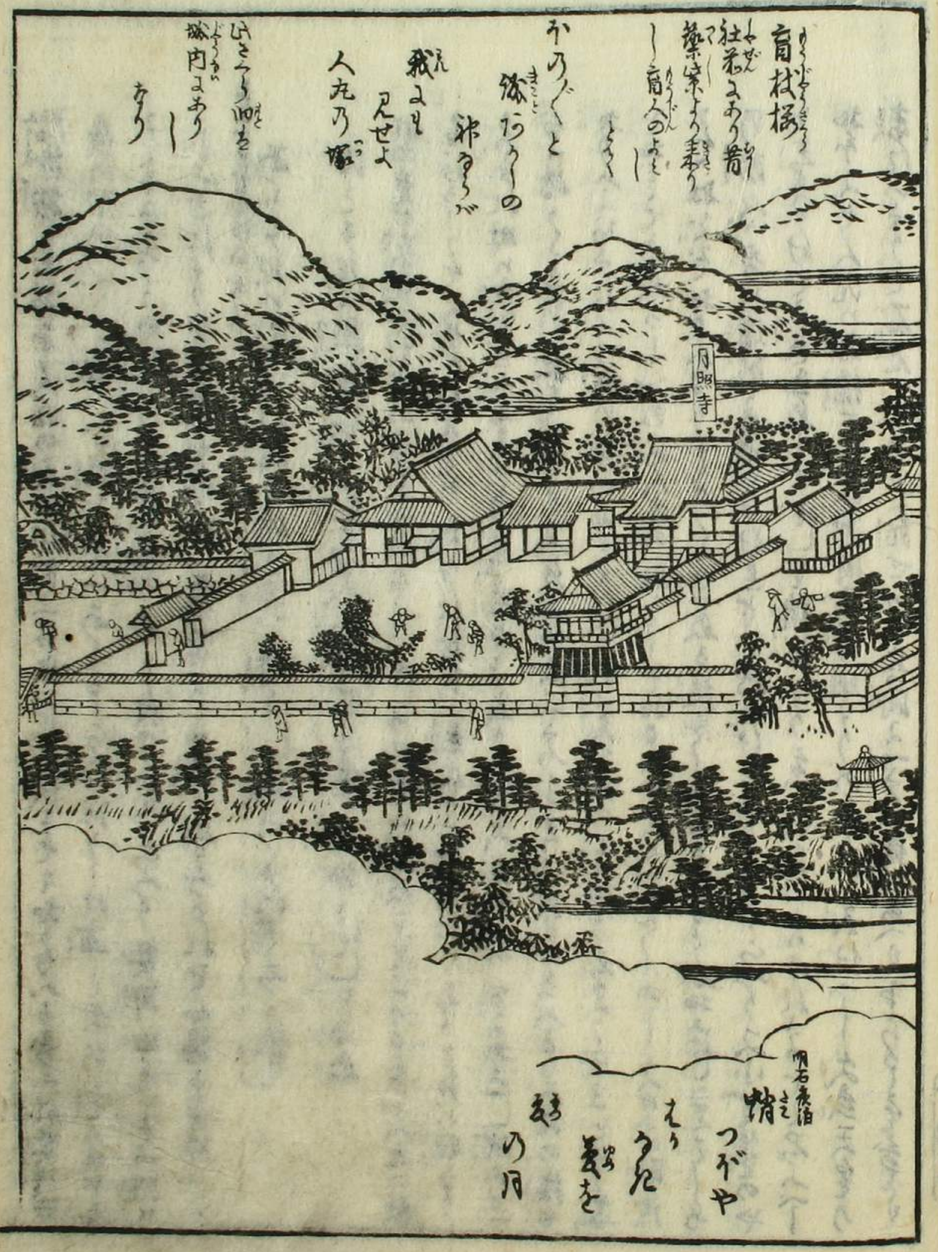
脇塚



山深き其の末綱をゝ
もの主イカナコとゝひく
美くしき池はいとゞ
加へ蓼佛湯よ

池を分ちて長奥い
そのまゝ鶏よひく
雲ろん中の池
甚奥〜
兵庫の郷よ
つゝ〜
カニスコ
これ
なり


人丸
芭蕉塚


月照寺
人丸の塚
つぶや
の月

風体抄云柿本人丸の哥ゝ此歌上古中古末代までもおよぶべき哥之根源也曰
歌のかのゝくゝとまぐむれと歌のあくるゝ人びとうゝ丸浦と明行空の無ろ
そさうゝ心ゆうそれとぬぎひろはやはゝとうゝ奥沖曰先こそのぬい
くてこれより下ゝ哥ぬぎひろはゝ丸ゝさらゝ浦ゝぬまぐこれとも得るゆは
新古今巻第十八雑歌上
あらそれいかいそれ附よ浦がきを漕はし舩のうかさをゝ

ゆこされよ波のゆゝひきるゝはるゝ妻をゝ掛さてしもきぬ

此二首の歌を引て此哥とゝ見なしゝ人丸の哥い雜波をそよめる哥ゝ人丸の歌
をゝうゝそよめるゝは石こそ哥ゝれ歌の意をゝ掛るゝ。あらそれい暁の
うゝそれ附いゝ人丸のゝ上の句よ掛ゝ次の二
句い浦がくゝ舩をゝ。そゝうゝ人丸よ掛ゝ。ゝうさをゝ。ゝうゝ人丸の縁句
掛りゝ。ゝうゝ次の歌のゆこされい此先ゝ波の者ゆゝ者ゝ人はゝと掛ゝ妻
を掛ゝてきぬゝゝ人丸の舩をゝ。舩をゝ。のゝ人ゝ丸の舩をゝ
ゝて舩をゝ掛ゝ。ゝうゝ者ゝ人ゝ丸の舩をゝ。ゝうゝ者ゝ人ゝ丸の歌
の陸人ゝ哥い雜波ゝ浦いゝうけゝ。ゝ波より系ゝ。ゝ。ゝうゝ。ゝ。ゝ
そをゝまゝうけてこぎ出ぬとゝ。ゝ。ゝ雜波より系ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
掛ゝ。ゝ人丸い掛繰天皇の御附石見國よりのゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

寛文年中塩竈松平日向守信之侯碑を建らる其文は林道春これを撰書し其序甚長文なれば畧す　銘曰

柳本之種　千歳模範　和歌之家　六義英華
山川艸木　詑物而感　雪月雲霞　單思無邪
言吉之葉　字字之花　聯技以茂　鋪玉無瑕
敷島道通　詞源水暁　馬生渥赫　詰乎無涯
几鳴高岡　白霧舟遊　廟祠認跡　有誰而加
赤石浦曙　冠蓋成衙

石州高角山と人麻呂の祠ろ　碑銘に佛國寺百拙和尚の撰と人丸車弦考に見へたり　又大和國添上郡法道森人丸の墳あり　大和名不国舎人麻呂の祠ろ　享保八年人丸一る年正月吉田侍従兼庵湯門侯兼雄朝臣奉幣使として正一位を贈らる宣命位記石州高角祠に揚る其時明石の祠より正一位と準ぜられ勅命あり禁裏仙洞の両御所より石播両社に法楽の御制あり　星誘曰当社明神は安倉を護る史実と違るの霊験あるとの人生の義と云

月照寺　当社の別当職なり本尊釈迦如来　安阿弥の作　開基は安堂和尚

赤羽神社　人丸社のゆゑあり古伝　赤羽村延喜式神名帳　赤羽は明珠の英称　所祭恐くは羽明玉

なるべし　天日槍播磨国に泊る其持来る物の中に羽白珠赤石珠あり　釈仁記に見へ西郡名もそこに出る　○如見社本松寺

明石浦　郡中海道の勝景なり　明石潟　潟は海道の称　明石海　明石離　明石濱　明石迫門　迫門は海路しのるせいきを云　ろ　ろもそ迫きゆゑ十八丁也　明石洞　明石里　明石躍

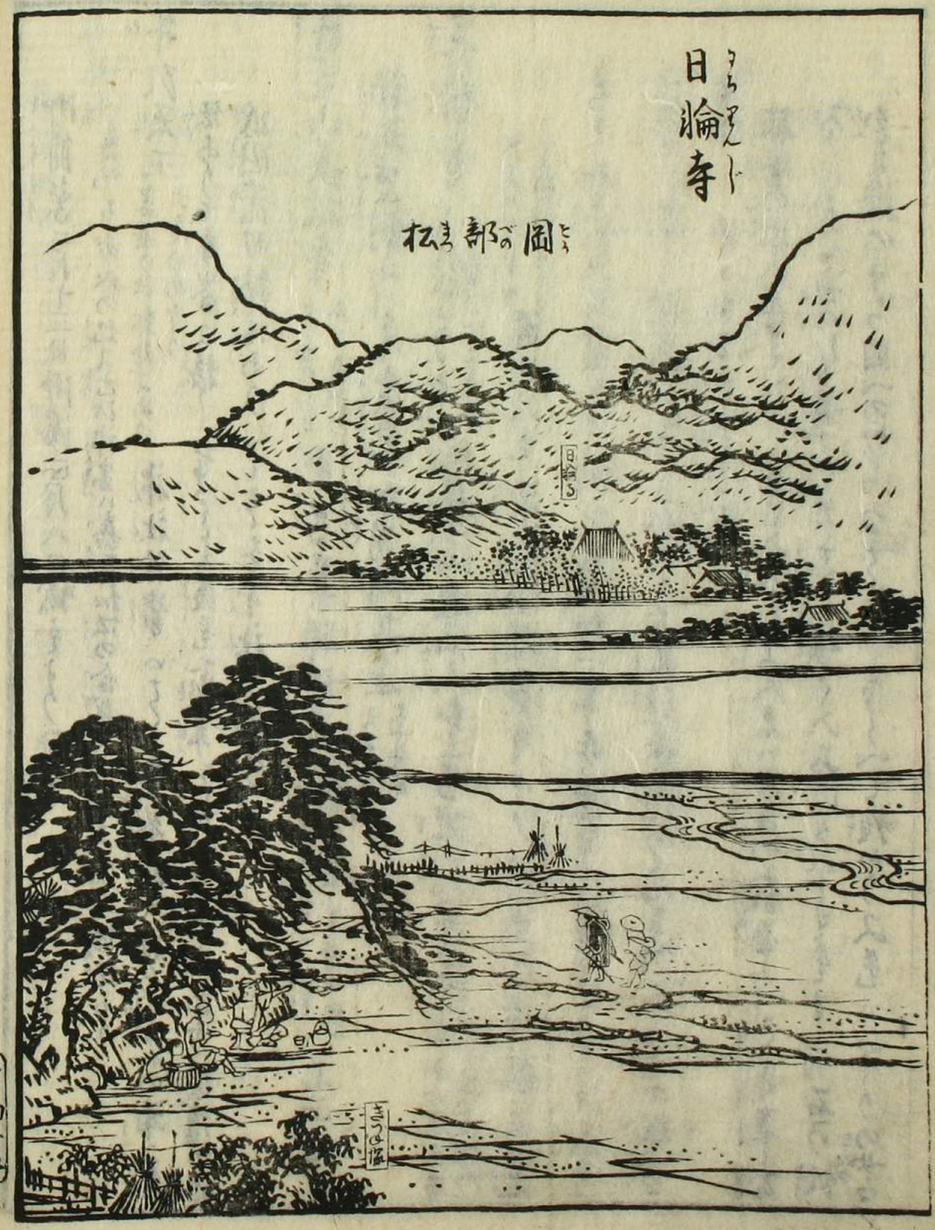
見まさせば赤石の浦ゆふけるや史のかなそ出ぬる嫁うらし　門部王　拾遺

浜ゆふ　ゆふ　ゆふ　

明石宮社
六月十五日紅九艘
を湊海の岩やう
まとしつ紅毎ゑ滋
ぎつまくくもゑ浪
まろ笠めさはしき
ゑざるうち水
りとい浪海ゑ
まーまセ
ーー
ぞぞ
尚侍記ゑ
ろ泉ゑーー

九丁余小い郭門より連り南い海邊市店たゝなる凡三十六丁所名色々雜
沢地より兎洛の地之此餘い西門の外東西新所南い海辺の漁者所新
濱新濱名之郡中い十六荘より村邑数々百廿三之湊下のち浦
数い大抵二十一箇寺社大小大抵十社産物い鞭米鞭 伊川谷をゝて美上ゝ
棉布 竹ゝ笠藁席穂蓼 大義谷あり 焙爐具 酒壺 編 今ハ色ハ食
鯛 天正九年十二月厳者攻後〳〵て秀吉ゝ播州ゝの外 鰹 章魚 干章魚 海苔
信長ゝ献之りうゝ之しの千鯛ゝ箇と見へゝ
章魚の ぶたくん 飯蛸 あるひい 蛸 編 或ハ 蛸引 鰯 凡 俗言白 ぐんでん 揚梅 実 塩下干菓ゝ
ゝ菓物ゝ制をる物ゝ凡 平蕨 海ゝ馬藻 藻 海苔
權寺 今ハ光明寺と云ハ和寺宮の寺ゝて京ゝ門の傍ゝ 御茶屋 塩川の東南ゝ茶屋
光源氏の故郷ゝ之ゝ 当城を拝領の地なり 其ゝ義詳なり
月山 先近年此所の名ところ〻て川ゝの西ゝ海ゝ浦の東ゝ
此所ゝ月見る所ゝ一ゝ見ゝ所ゝ 紀伊新撰金剛山生駒の手ゝ 讃人西ゝ國小海南ゝ淡路
つきゝ〻大和路をの後しまゝ 紀ゝ之十八丁ゝて 堺ゝの咽喉なり 旅人忘ゝ〻ゝ
岩屋神社 月ゝの西 延喜式神名帳ゝ云 弥生ゝ 祭神六座 伊特諸伊
特冊 大日霊 月讀 蛭子 素盞嗚 例祭九月十三日 名称 旅六月十六日

御冊祭 二月十三日 御湯 正月八日 塩ゝ献
○舊記ゝ云 永の丸ゝ云 ゝ神宮ゝ 嘉右和坂の合戦ゝ 先ゝ今ゝ 絵紀ゝ
牛頭天王 岩屋の社 郭外ゝ 神社 祭豊 廣峯ゝ 神ゝ明石の浦ゝ 垂
六座の内なり 廣峯ゝ 稼〳〵 ゝるゝ義ゝ 数年ゝ 絶て平安城東方 法護の
法あり
祇園荒明 勅諸 ゝ社ゝ
竜王山長林寺 岩屋の社の ゝ 本尊薬師如来 後京宇合明石郡ゝ 元正帝の
勅願ゝ創ゝ 宝恵和尚開基 天台宗 遷る七佛薬師の内ゝ
若樂寺 号法写山西の麓門 開基法道仙人本尊地蔵菩薩 東叡山末天台
ゝ南ゝ三丁ゝ 宗之恵心の他の
地蔵ゝ今寺中 実相院ゝ
ゝ 傑元元年平清盛播磨守ゝ 附諸堂寺院ゝ再建
ゝ寺外五百貫ゝ寄附ゝ 養和二年寺僧名清盛ゝ ゝ論の
石塔ゝ建て供養ゝ今ゝ 押ひく不絶寺門の内ゝ明石入道の墓ゝ
附記 源氏物語明石巻大意
摂磨の和乃守ゝなりし明石入道ゝ 入道ゝ 家 ゝ 罪 進 ゝ
ゝ元ものゝ世のひゞ者ゝて其志ゝ捨〳〵入道 ゝ 明石の 紀
ゝ之濱のゝ国べのたちゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ



明石のとゝろく入るいさまり者ひて一つの祝ひと往吉の祝ようけて我とこそかく
世の憂いさらしもけむもいろ〳〵祝ひるるに歌いまを
さたぐらるとせば海よ彩とうげまと遠流してありつる小野氏源氏源広と
さをゝ〳〵まして雷拝びさしくひらられ両風まけしきゆ日沢よありて源と
雷鼎よ拝ちゝ・又又源氏の御文帝の霊義よ月久移ひけ源広生をまやく
うちされとこの者げあり明石にも往吉の祝の告ゑどにより源広へ源氏と
逆ひの松よりひて被義の告ゑど信りゆせば源氏と義よりひ合さして新しき
者に入人つゝく入るのうち〳〵入せ移ふひのつゝよいろしき堂と立て三蜂と
紛ひけ世のまうけよい秋の田のゝとりゝ拝さら稲倉をく立てたあけゝさう
枕けうろたち汲よ拝ぢてむもろぐもい園部のやうさよ移り居さう源氏い松ゝ
御車よを入せ移ひぬきば入るの方ゝ月日の光りとゝるう心ちよ住りるる者の
さまとばさゝ〳〵ないびつりゝ心ゝ人生さゝく石茶載ゝどのゝさまえも云
ゝ女入江の水ゝど往師いかきゝ及ぶはゝと月色入るよ琵琶ひきゝどゝ心あけさゝ小
ゆでらを往よ女と等せ嫁う移ゝ〳〵せゝも心よ物とうやむるやうやいう
ゝと聞ゝ入ゝるゝ行ひゝ久〳〵 拝りゝらんゝ移のゝぐややよいふまぐゝゝぬ
人ゝ実ゝるゝやまん 此後日ゝうゝて八月十三日よ園べのむゝろゝ乃さら〳〵馬よ
ゝまつゝたまひてゝゝろゝふゝきさまゝ乃ゝたゝゝちきゝ〳〵せたまゝひ
此のち七月廿日あまり帰洛乃宣下まゝる小ゝうゝのとい六月廿ゝう

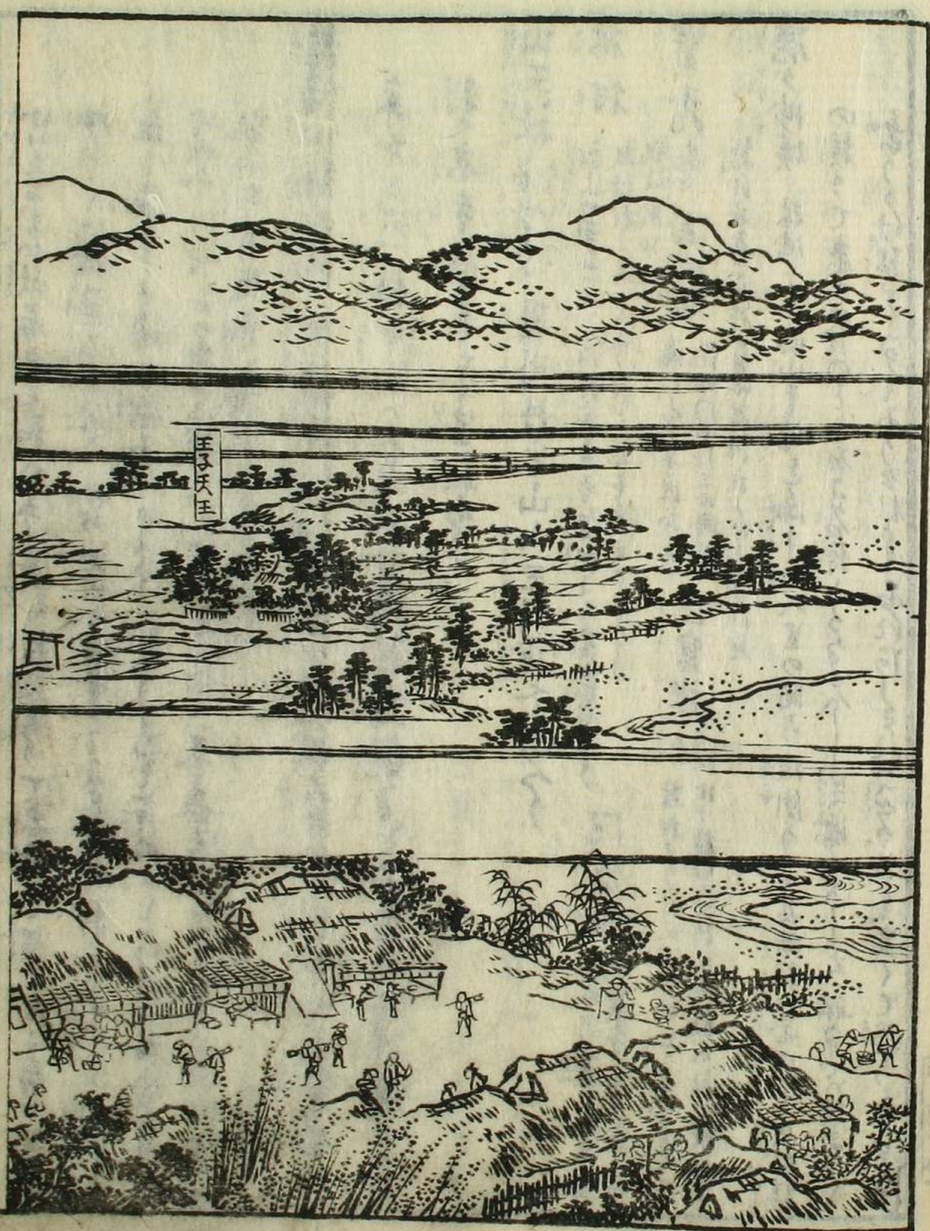
明石のとゝろく入るいさまり者ひて一つの祝ひと往吉の祝ようけて我とこそかく
世の憂いさらしもけむもいろ〳〵祝ひるるに歌いまを
さたぐらるとせば海よ彩とうげまと遠流してありつる小野氏源氏源広と
さをゝ〳〵まして雷拝びさしくひらられ両風まけしきゆ日沢よありて源と
雷鼎よ拝ちゝ・又又源氏の御文帝の霊義よ月久移ひけ源広生をまやく
うちされとこの者げあり明石にも往吉の祝の告ゑどにより源広へ源氏と
逆ひの松よりひて被義の告ゑど信りゆせば源氏と義よりひ合さして新しき
者に入人つゝく入るのうち〳〵入せ移ふひのつゝよいろしき堂と立て三蜂と
紛ひけ世のまうけよい秋の田のゝとりゝ拝さら稲倉をく立てたあけゝさう
枕けうろたち汲よ拝ぢてむもろぐもい園部のやうさよ移り居さう源氏い松ゝ
御車よを入せ移ひぬきば入るの方ゝ月日の光りとゝるう心ちよ住りるる者の
さまとばさゝ〳〵ないびつりゝ心ゝ人生さゝく石茶載ゝどのゝさまえも云
ゝ女入江の水ゝど往師いかきゝ及ぶはゝと月色入るよ琵琶ひきゝどゝ心あけさゝ小
ゆでらを往よ女と等せ嫁う移ゝ〳〵せゝも心よ物とうやむるやうやいう
ゝと聞ゝ入ゝるゝ行ひゝ久〳〵 拝りゝらんゝ移のゝぐややよいふまぐゝゝぬ
人ゝ実ゝるゝやまん 此後日ゝうゝて八月十三日よ園べのむゝろゝ乃さら〳〵馬よ
ゝまつゝたまひてゝゝろゝふゝきさまゝ乃ゝたゝゝちきゝ〳〵せたまゝひ
此のち七月廿日あまり帰洛乃宣下まゝる小ゝうゝのとい六月廿ゝう

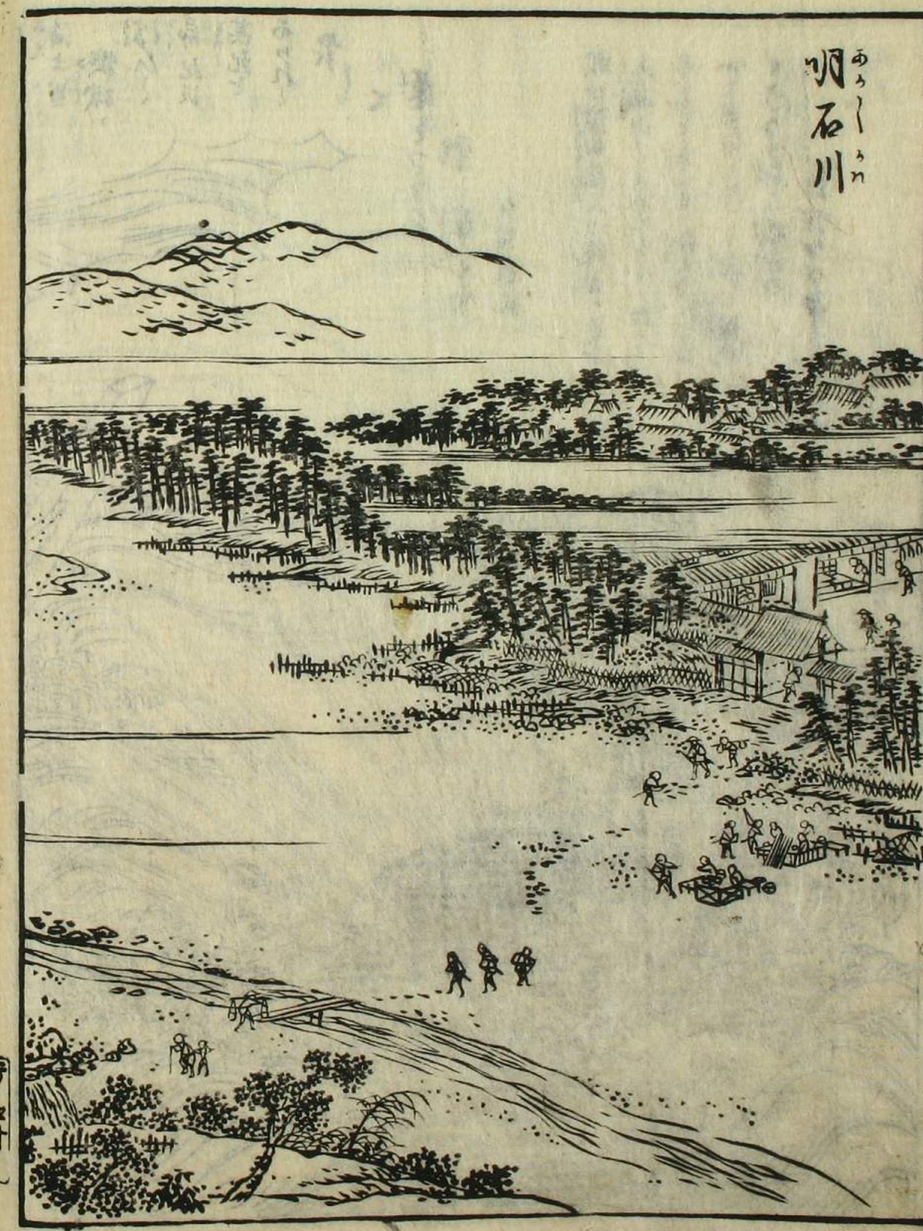
さぐりぬるをそれに帰京の後むかへ琴を弾ずるに
あしゐをとりみたのろをくゆるひとをなつかせもやかけてまのつゐ源氏あ
までの水くきをちぎる中の絃のをくゐをいとをくゐ
も旅のそらをくをしうり源氏も中宮の調ずる琴をぬすびのしたまうりを云

無量光寺　月浦山と号し若樂寺の南にあり弁慶寺と云
海士男枝塚　月見の松ともうびて一株の松ありまう
惣門　鎌下西の口振袖門と云門内南の小松村　明石川　無内の外にあり川中二丁余ち海へ流
皇王村　明石川より西の磯に長き町にて西彩町と云王に接し村の小森の中にあり
人皇十代崇神天皇の御孫市道押鞍皇子の後裔計弘計の御兄弟
みな市辺皇子雄略帝に討たれ給ひしより後計弘計兄弟を
匿ひ給ふに及ぶやと恐れ給へ共丹波余村郡に逃れ隠れ給ふ
日下部連に若い遊に播磨國縮見の石室に入て編笠乞ひ
後計弘計を山連が幼稚と思ひ給はざれば明石郡に来て編笠乞ひ
倉に牛飼ひ給へり後に伊豫の東日部の小椿と云郡縣と

巡幸して租収斂の打ち乃編笠の彩霍の領酒の時御兄弟に拒酒
を秉しめ給へ後源く酒酬ち〻琴を掩〻て皇子〻〻に御
兄弟に舞をすむ義美の小辞〻〻に後ひ弘計衣帯を懸室まの
うをを汎ひ立て舞給ふ其弦に曰
○出雲い稍多ふの雲〻〻〻〻の彩霍の十掬の稲の穂懸垂り釀る酒
美味喫載中略　○石上振の水掘中代末載帝道の宮に天下の多國多
押鞍乃御裏乃僕先なり
先を出て小椿大に移るき席と離て再拜し即郡民に宮を造
して安座せむ即此状を以て清寧天皇に奏聞をれば大に歓び
給ひて速に明石に迎へ給ふ後に弟兄天皇に中へ弘計
王に仁賢天皇に中へ後計王の子也後計王の子也
知らく仁恵徳政の帝にて世を治て今に村の名に皇子と唱へ
紀上塚跡　里俗此所を　昔る山花近寺友住居に後蜂須賀右衛門居る天正
の初ち三本長治の墓老山塚寺居る秀吉三本長の母親記とゝ門と号田
甲斐守長真に守らしむ慶長年中池田輝政家老出雲守居る元和中

海士男挟儀
元慕天皇十四年天皇漂落海中
海士男挟儀
海ひく即死
其死をあわれと
思ひ
墓をつくりて
葬る事今
の世に在り
或曰遠曲海人の孫なれ共
先祖ひしものゝ今の世
ありびと
海士男
女を男ひしかよく息を
もらるる所の後世の
者明らめ


玉子天王


明石川

小笠原忠政居る元和元年尚那城ありて忠政の城元居る所
地ひくく山城堅ろくつり 神ち池田出羽守こゝに居る所新しく水門を開きて
松と通りしを所の標石川に今尚あり是を右波戸と云元和小笠原云
の所今の明石の城を移し云 続き年記十二巻嘉吉元年赤松退城の所
明石松上の城郭と構ふ云は是なり

龍燈山観音寺密蔵院 松上村 真言宗浄土寺末寺 開創延喜
年中弘法二佛中間に大寺師地蔵菩薩観音と安置し赤播磨の一大
刹之末寺又ケ寺寺宝数あり

山王社 嘉吉院の 播州丹生山山王明神之ところ

林村 松上の西にくゝ村宝蔵寺 福院と云寺あり 明城趾 三本ノ幕下大屋
松浦村と名つく今村と称ともこれなり 肥後守居る二天正の
乳ヶ武功あり

賓蔵寺 真言宗 海川ゝと学れ所なる 上宮神社 林村より巳丁上の丘にあり近郷
毘沙門正月三日開帳 巳ケ村の氏神之を龍又社大明神と
称れ 延喜式神名帳林神社と云れ

鹿ケ沙漠 林浦より西小笠原を海中十八里の間の浅瀬なり其西服い兄浦 長浦漠
の残りて麻の岩のごき所ゝ名付 ゝ岩ゝ入一大 松多くい
高りけ駆るくるもあり今はこれ無 安くて過ちみる

宝珠山十輪寺 地蔵院 王子村西の端にあり 本尊薬師如来 服五日光十二神あり
真言宗 松上嘉吉院の末寺 明石郡ゝ七佛薬師を建ら外ゝ此寺の一神と造る同て世ゝ八神薬師ゝ云ふ里俗浜
く麦麦の粉を作て供ル

和坂村 王子村札場より八丁余て此村 [illegible]
[illegible]の俗い他国ゝもいりて何とゝ [illegible]
右の[illegible]の小藤[illegible]
左右の[illegible]を稲荷山[illegible]
[illegible]嘉吉軍記ゝ和坂合戦い播磨[illegible]
[illegible]ありて京都[illegible]
小[illegible]赤松常陸の則尚和坂の構ゝ[illegible]

赤石 林村松江村との間 汀を去ること七八里ゝ大さ巳ゝ又天巳方之甚ゝ甚赤 陸より見る
ゝ強ゝ松ゝの出ゝ見るべ 三月三日ゝ満より見るゝ 群集ル是
水ゝに別るゝは潮ゝ浸ゝ別ゝ三ゝ赤きゝ鮮ゝ見ゝ事ゝ郡名の赤石ゝ云ハ
此石ゝ記ゝ

慶命山坂上寺 鐘ゝ坂に右の寺 女の[illegible]

松吉城趾 吉田村 ○下津橋城趾 東洋 朝霧陶器 若中谷村ゝ焼ゝ南蛮に似ゝ甚
松江 東西二村 此寺ゝ麺を揉ゝて其味勝ゝ [illegible] 遠物ゝ[illegible]人松[illegible]
て[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

和坂
慶命山坂上寺
三言宗弘上嵩義流
末寺例年三月七月
廿一日ノ法辯来ル
寛永の比の再建
尚那先生書附ノ
額ナリ

清水里　長池駅の西にあり　尚國又信濃

夫木　拝りたちて清みの里にあまびえとは外に宮もとるうる　常陸

清水川　世中のちくがの下流なり　官ろくて
信水の里の西に流る岩あり　長池駅

藤江浦　松江の西にあり　世〳〵に古へ入江にして石不之今は民家の居地となり　葦の華螺
裏れ鰒狩る王余奚と採りて　奉奚壺と制と和名抄羽石郡葛江の浦也
平記に長江の離と見へたり　古今歌あり

拾遺三　いつしかの長江の浦にきつるあまとりぶね猿引く我と　人丸

江井ヶ島　八木より西西海東海とたつ　郷人相伝へて云ふ村の西海にて釋の紀基
今西江井東江井と二村ありて　樂く不方の所海とたつ地中今も石木ありて　又八木村より此海岸
よりくの墨立曲折屏風のごとし　故に屏風浦とも云ふ　一丁許り水
奥に磯あり名付て海鳥とたつ　又七里乃岬とたつ　老い兵庫の海より
七里毎に奥に磯あり　老其一に其磯の中に馬石と唱へる　拍子　形ち馬に似たり
両海の村これ名るに風海の言を免る　紀基これと樂く乃神の山月
如月に漁法と供養仏を　老い汀浦に生海鹿神馬藻を多く採る
○江井とたつと云ふ地不詳　故に由井とたつも通ずるなり

魚住泊　今東海西海中尾浜谷　西國にもと魚住の所と云　若紀基の樂く泊乃湊なり今い堤立て里
民の居地なり尚茅原江井海とたつ

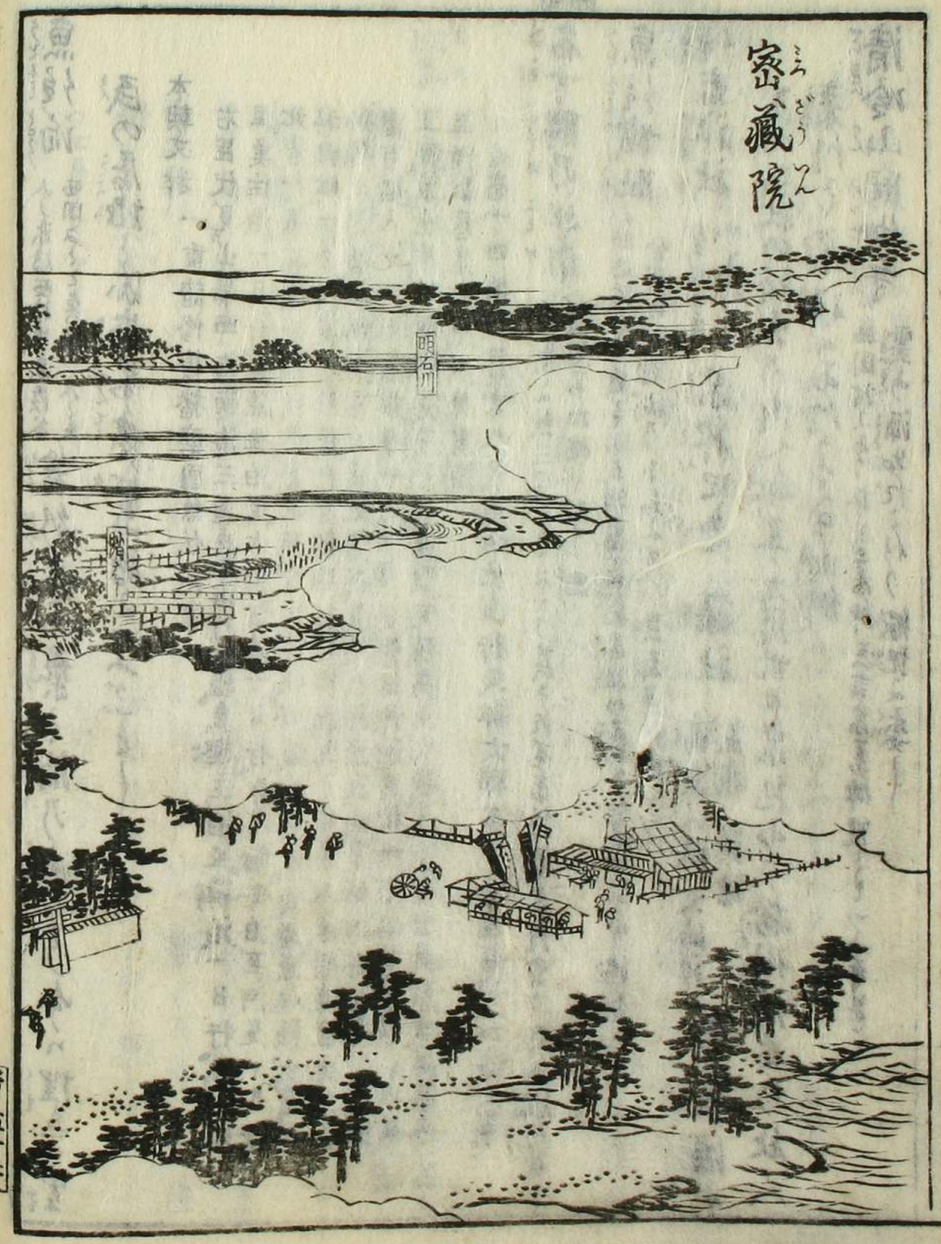
本朝文粋　一重請修復播磨國魚住泊事
右臣伏見山陽西海南海三道舟船海行之程自擬生泊至韓泊一日行自韓泊
至奥住泊一日行自魚住泊至大輪田泊一日行自大輪田泊至河尻一日行
此皆行基菩薩計程所建置也而今公家唯修造輪田泊長廢魚住泊由是公
私舟船一日一夜之内兼行自韓泊指輪田泊至于冬月風急暗夜星稀不知
舳艫之前後無辨濵岸之遠近落帆棄檝居愁漂没由是毎年舟之蕩覆者漸
過百艘人之没死者非唯千人中略　今修造件泊其粉物充給播磨備前両國
正税莫也早降聖朝援手之仁令脱天民為魚之歎凡厥便宜具載去延喜元
年所獻意見之中不更重陳
延喜十四年四月廿八日　従四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上奏事

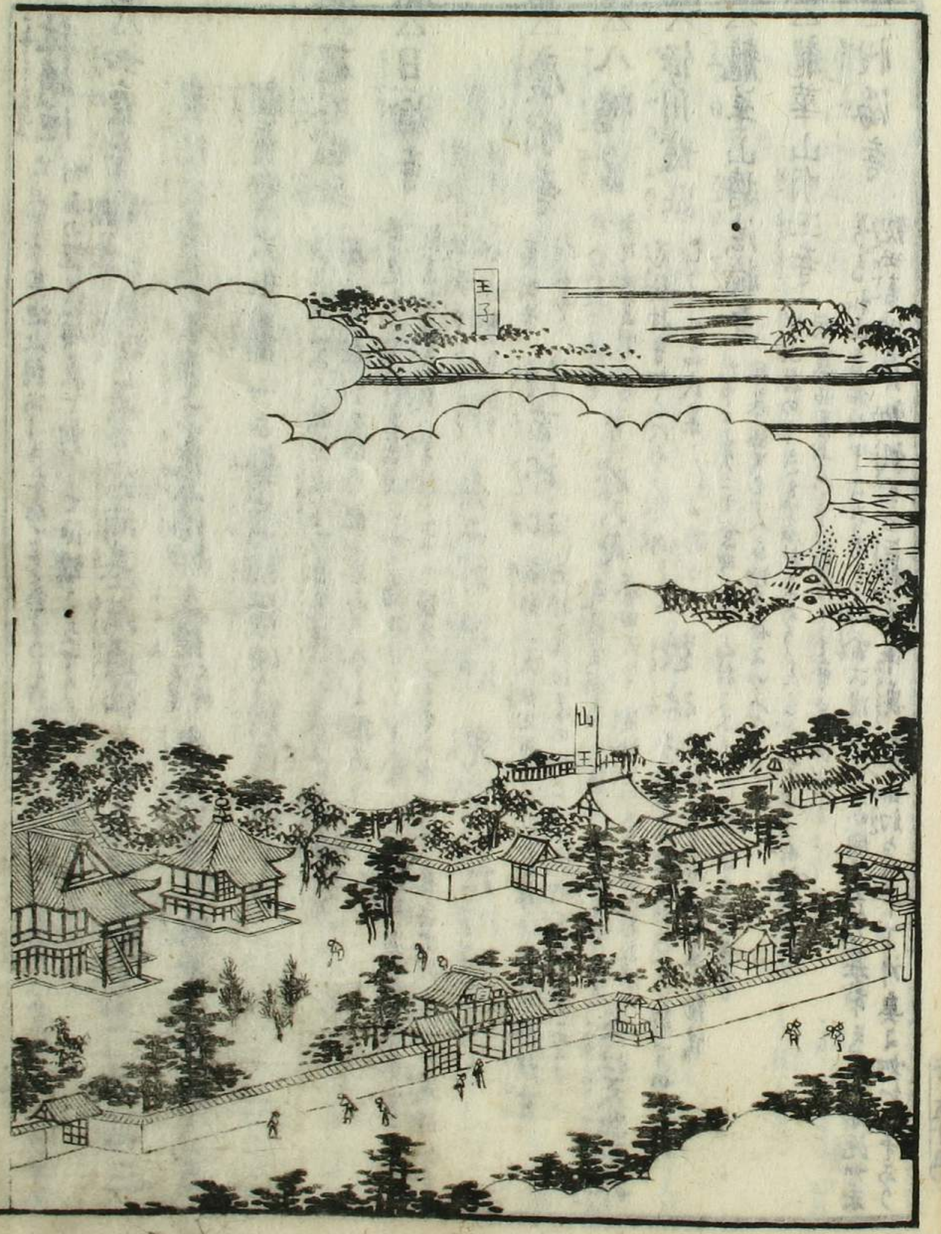
名寸隅乃松濱　万葉に秋三月若見と　接とあり故に姫〳〵嶋〳〵
魚住城趾　西海村にあり城主を之列侯長能赤松の幕下にて永享中滅亡
合戦の舟則法乃下にあり　後魚住武功あり

住吉祝社　奥住の所　中尾村にあり　柴祝社　高良　八幡　大海祝　芦入浦か
荒祝　巌島

東北二社の住吉乃内に毎年九月廿日祭礼あり　摂州住吉の社人
来りて祭礼あり　別例

清冷山圓伽寺　西國村にあり　本尊薬師像　言宗　薬師像にて人寺也
霊あり　漏出たり　城趾なり　安〳〵


密蔵院
明石川



抹淵池　大池なり其池水引ひ一きを仏をきまりあと引て切用人の義とりの大なるしつうり明石の悦義厚義を刻して池塘にまてり即文集ゴ月人くり

△如意寺　櫨谷村にあり　櫨下より二里　天台宗開基法道仙人なる地蔵なる山門絶接三重塔坊舎北に不動堂又薬師堂縁基　文殊堂　常行堂　三昧堂　護摩堂

観音堂　大伽藍一ゴ餘歳相續修繕の地なり

△櫨谷城趾　池谷村にあり城主長治の幕下天正乃頃の忠あり今ゴ塚あり

△日輪寺　雪光ゴ字は忠谷村にあり城下より一里余天台宗開基法道仙人なる手長治の幕下天正乃頃の忠あり今ゴ塚あり　観音本尊の彫は雪村の筆なり　海中食者氏を懐ひ氏長ひに寄て後浦州着　笠春山西秀力と会ず　薬師寺　建立年代の堂宇なり

△慶明寺　菱明寺村にあり

△住吉神社　柳部の在細田村にあり祭神は住吉天神宮社家の川ゴ浦州の山名ゴつ人あり

△八幡宮　世人又社の宮と云　平村氏菱明ゴ祭神氏鹿　気長足姫　玉依姫　大鷦鷯天皇　誉田天皇　笠佛彦天皇　此外摂社ゴ　奥社天照皇神　荷鼓村寺畑ゴにあり奥洲ゴ　明石氏某ゴ　惣社　毋川の在池上村にあり即中の惣社ゴ人延久三年勅造

△伊川城趾

△龍華山溝法論寺　なるゴより二十余町小中ゴ村にあり法宗なる地末寺　用基西ゴ上人なる坊ゴ谷ゴつ人ゴ

△龍華山明王寺　中ゴ村のつき赤名村にあり法宗なる石勅明王　用基西ゴ上人なり西流ゴ寺宗ゴ

△性海寺　考ゴ和ゴなる和村中ゴ寺あり防舎ゴ流ゴ宗開基ゴ基本なる阿弥陀如来観世音菩薩古い勅祀石の巨刹ゴて中興　叡　如幻なり十丁許奥ゴ如幻のゴあり

法乙絵ゴ小寺ゴ宮ゴ今伯坊十二倫有流宮寺の宗ゴ　性海寺より一里ゴ法宗開基法道仙人なる観世音

△近江山近江寺　性海の和ゴ不動十六羅漢なる其外什物ゴ　社道接渕　田村にあり若別不安治ゴ祀更水雄ゴ顕度ゴ　ゴ出ゴ在ゴ再建ゴて今近郷ゴ　辯寺

△雄ゴ尾雌ゴ尾　三庄ゴ三里ゴ　墨の方ゴあり

西山東西ゴ雙ゴて登ゴ尾ゴ　雄ゴ尾ゴ　雌ゴ尾ゴ　丁斗　主樹ゴ

く小祠帝釋天ゴ祭ゴ毎例年九月十日ゴ山ゴ開ゴ西の方雌ゴ

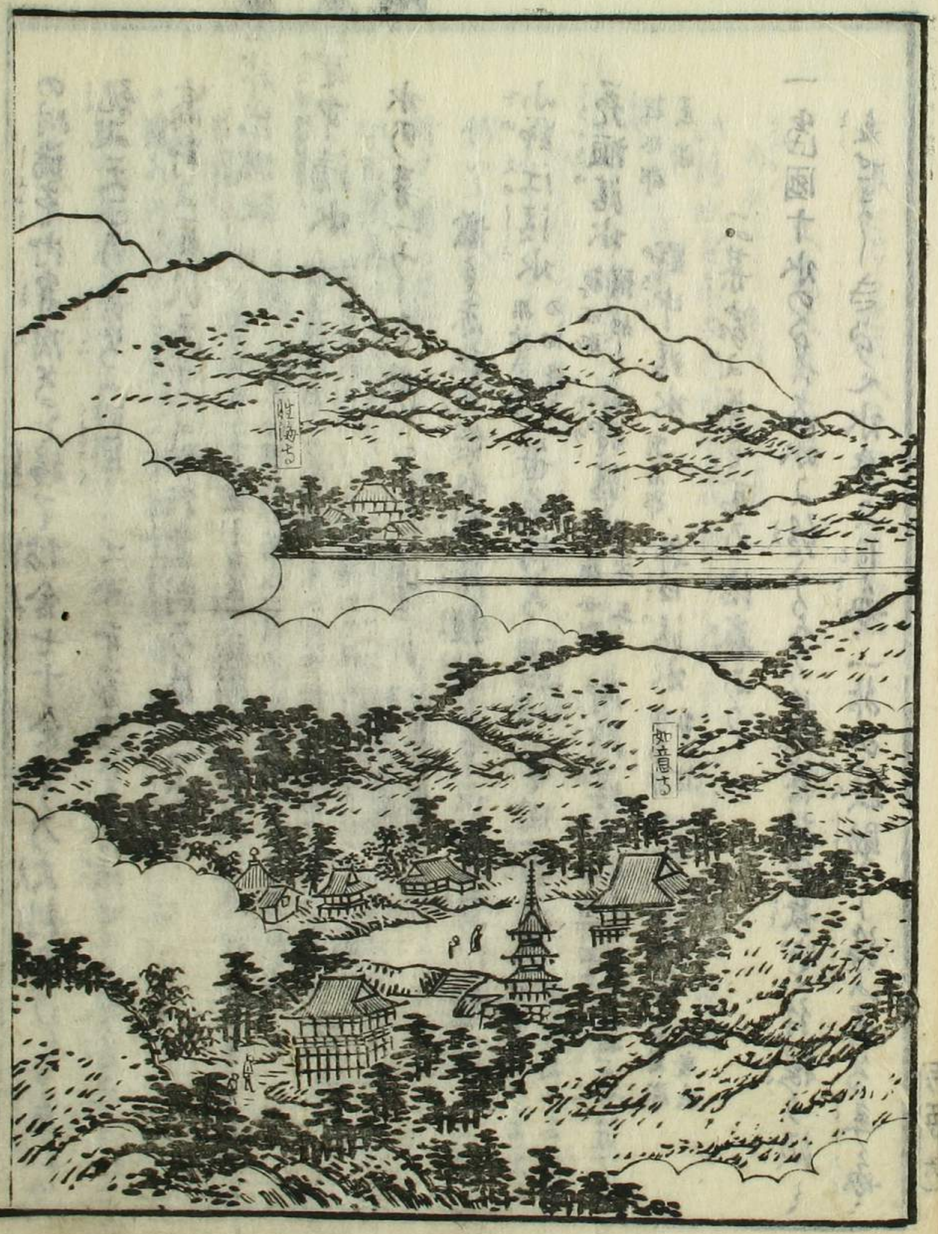
尾ゴ峯樹ゴ　尊稲田姫乃御夫婦を祠ゴ　祠ゴ　舞基ゴ　素盞嗚

一百八十一神ゴ　表彰ゴ　此ゴ隆盛ゴ

△最明寺　雌ゴ尾の下にあり　鎌倉山ゴ　用基法道仙人ゴ　相模守時頼入道諸国巡行

雄子尾
雌子尾

三月の
初すり
中ころ
まで
り
り
女子
を
い
月
を
と
か
つけく
消づる
多しさる
きの
は
法湯
石の名よ
さ
こうて人の進
めと
結ふは
堅
香
カタクリ
こ云
痛
症の良
薬
湯石
法石


性海寺
如意寺

近江寺
性海寺
如意寺

の附属寺御寄附なる編旦坊舎七十余宇の大刹なりしが慈仁の
乱又天正の兵火に回禄して今存するの一宇を残せり真言宗にて
高野に属し座中に附記歯刻の梅とてあり

△神出城趾 唯に尾の下西に当り城を花房門射花次に赤松の一族にして建武の比より武家
に属して系合録に神南の戦に功あり天正の乱に亡ぶ

△地中清水 雖乏清水村より北に八丁東小野中村に森あり林の中三間ばかり
混沌の新に湧出て清水川へ流れ海に達す 是播州十
水の第一なり世に云ふ

城を赤松と総称則房雑誌に十水を定めし條

小野江清水 根岸郷の細流を 姫路清水 揖西郡 小野清水 揖西郡 御所清水 揖西郡田字
揖西郡 野中清水 明石郡 野口清水 印南郡 野口村 落葉清水 佐用郡 舟渡
夏清

一国国十水の内名水に絶えざるべし甚村の長心と付猥り汲み
尽せまじきなり水毎に一年の扶助に給ふ未多年毎

十俵とぞ〜せ三人々寄付不也

文亀三年二月 志水甲斐守

山清水を山の内也麓数無して猥に物捨中間愛者也

月日

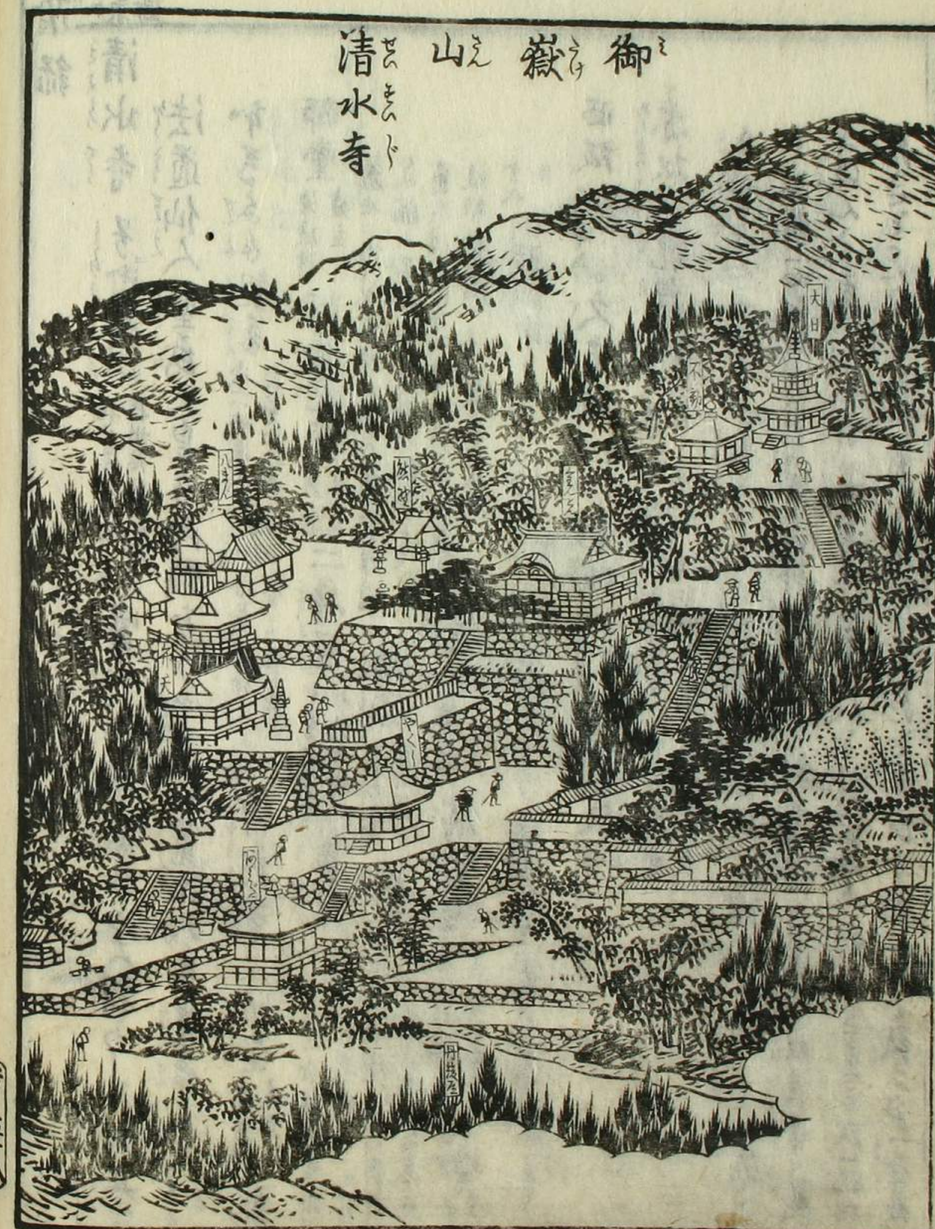
いにしへの地中の清水取る人しりてけれを志尽人を汲む
取る人しりてけれを志尽人を汲む
たくそれるそと人情のよるよせくそ泡むいとろろく推量の心なり
那いつ〜へ〜り見賞〜ろとは久ども尚大古古人の歌の考に〜とれば
附ぞ若ち住毋〜ぬくいの空へうなられ其つ〜〜〜しのりるれ見まれ〜
山余撰集の古歌数多あり 墨ぞ悦巌酒詩序あり文集より見るべし

山家集 なりまの書写へ多くなる中の清水と見るべ一むしみのりるる
年経く修行もとく通りるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

むしし見〜地中の清水うらう孫い我うげとりやとひ出〜ん 西行

清水の林の中に祖父松庭帰雲の名本三株なり中より庭帰
松の其枝の片なるべけづり掘〜幼児り見とれむ庭ときとやむ

清水寺　号御嶽山　摂津国東成郡　播州丹州の境なり　當山は千有餘年の大利にして開基は
法道仙人聖武天皇の御願なり中興は寛治元年光西上人天台宗
なるなり　観音は西国第
十六番　堂は安置
師堂　地蔵菩薩　阿弥陀堂　地蔵菩薩　二層塔　なる阿弥陀
観音女御　奥院　なる十一面観音帝御
祝願年再建なりて安
慈也。御法名祐。地蔵菩薩。祐明
八幡。不動。天満。松風。鶴松と称す
寛永月十日干時紀伊紀州長安
法印賢精　天王　義宗宗次
十八月　西坂なり十八丁　一丁毎に
標石あり　清水塔の後
福富　毎年二月初午
二三の寺と共　大會六月
西坂　法華山　久米坂　明石　中坂　中山寺有馬道
赤松氏菊墓　丹波坂の侍なり　月男　氏春　家則　法春　秀則
後五百余人武の中に自害
氏菊は兵心なるを大勇なりと力を勝るを涙して諸兄と睦じうして
忠臣二心と抱く官軍に帰順して只利義詮と共に真良帝を奉
四人ぐ者の関白師基を生しまれを討古地の兵敗を支る氏菊曰
危きと見て云ハ不義なりと二十余騎を率ひて師基と戦ふ屋敷


御嶽山
清水寺

宝明山

瀧の川
鈴尾山
峰尾山

光明山

光明寺

所々数ヶ所の疵を蒙り、主従共に戦ひ
自殺年又十七歳士俘義民郡内村又郎ゆゑ乙若丸を、抜けて薩摩
へ逃る

三草山古戦場　陸あの南三草村の東より
十里ヶ谷〳〵
平家物語一谷の合戦の時、源義経一万余騎を率ひ搦手より丹
波摂津の境三草山に陣を取平家は小松資盛有盛師盛三千余
騎三草山の西の陣を取源氏の大将蒲冠者小村次郎の平家、敗北
〳〵西の方に用とあげたれい平家の陣い周章狼きりを源氏変りしこの退治
皆所の人百余人と付た平家の大将資盛有盛忠房い面目を失ひ逃る
八幡へ逃こうゆ

三草川　上三草下三草の方
うあり

瀧野川　加古川の水上　川の東を新町と云ひ西を瀧野と云都会の地にて
流長易長〳〵町のまゆ舟流〳〵あり川中川岸に巌石多く流れ激し
日夜流るゝ瀑布のごとし白波雲のごとく立て水声聴し筏い為
縄を解き一本と流〳〵れ流れそ又筏となり弥生の比より年貢多く
のぼり急流に折るゝ岩に当り散花の右往左往落花に似たり後者也

と揉て昼夜の数万と知春日遠近の猟客変りて美歌花宴乃遊
こゝろをうつ

光明寺　ふく峯ふつの方なる
又峯山ふもの言宗　用基法道仙人中興る十一面観音　文殊堂　五重堂
鎌倉権現　当山　鎮守　二王門　薬師堂　経蔵　僧坊　十二院　大悲院　名僧大師の
自画乃像あり諸人尊ぶ

光明寺陣屋　光明寺にあり　初夏の比　義初る氏と舎弟直義と確執ありて直義
利すしてゐる氏兵庫へ去りぞく　篠丸ゐる氏引尾ふに陣を構へ家臣高師直い吟尾ふよりて合戦仕おゐき

瀧野古城　上瀧野にあり赤松氏重の政資の居城なり七条家の末孫なり〳〵
明應年中の人なり今畑よりなりて名ゆ中〳〵きこえ

鳴尾山　瀧野より西加西郡へ　引尾山　光明寺より加西郡へ越る山なり

播磨名所巡覧圖會巻之二終